

ワーニャ伯父さん

ДЯДЯ ВАНЯ

——田園生活の情景 四幕——

青空文庫

人物

セレブリヤコフ（アレクサンドル・ヴラジーミロヴィチ） 退
職の大学教授

エレーナ（アンドレーヴナ） その妻、二十七歳

ソーニヤ（ソフィヤ・アレクサンドロヴナ） 先妻の娘

ヴォイニーツカヤ夫人（マリヤ・ワシーリエヴナ） 三等官の未
亡人、先妻の母

ワーニヤ伯父さん（イワン・ペトローヴィチ・ヴォイニーツキイ）
その息子

アーストロフ（ミハイル・リヴオーヴィチ） 医師

テレーギン（イリヤ・イリイチ） 落ちぶれた地主

マリーナ 年寄りの乳母

下男

セレブリヤコーフの田舎屋敷での出来事

第一幕

庭。ベランダのついた家の一部が見える。並木道のポプラの老樹の下に、テーブルがあつて、お茶の支度ができている。ベンチ、椅子、それぞれ数脚。ベンチの一つに、ギターが載っている。テーブルのじきそばに、ブランコがさがっている。午後二時すぎ。

曇り日。

マリナー（ぶよぶよした、動きの少ない老婆）が、サモワ

ールの前に坐^{すわ}って靴下を編んでいる。アーストロフが、そばを歩き回っている。

マリーナ（コップに茶をつぐ）お一ついかが、旦那。^{だんな}

アーストロフ（気乗りのしない様子で、コップを受ける）あんまり欲しくもないがね。

マリーナ　ウオトカならあがるんでしょう。

アーストロフ　いいや、ウオトカも毎日はやらない。それに、今日は蒸し蒸しするしな。（間）ねえ、ばあやさん。あんたと知り合いになってから、どれくらいになるかなあ。

マリーナ（考えながら）どれくらい？　そうですね。……あん

たが、この土地においでたのは……あれは、いつだったか……
まだソーニヤちゃんのお母御の、ヴェーラ様がご存命の頃でし
たわねえ。あの方がおいでの時分、あんたは、ふた冬ここへ、
かよつて見えましたよ。……すると、かれこれもう、十一年に
なるわけですわねえ、（思案して）それとも、もつとになるかし
ら。

アーストロフ　その時分から見ると、わたしも随分かわつたろう
わねえ。

マリーナ　ええ、随分。あのころは、お若かつたし、おきれいで
もあんなすつたけれど、今じゃもう、だいぶおふけになりました
たよ。男前も、昔のようじゃないしねえ。なにしろ——ウオト

力をあがるからねえ。

アーストロフ そう。……この十年のまに、すっかり人間が變つてしまったよ。それもそのはずさ。働きすぎたからなあ、ばあやさん。朝から晩まで、のべつ立ちどおしで、休むまもありやしない。晩は晩で、毛布ケットのしたにちぢこまって、今にも患者から呼び出しが来やしまいかと、びくびくしている始末だ。この十年のあいだ、わたしは一日いちんちだって、のんびりした日はなかった。これじゃ、ふけずにいろというほうが、よつぽど無理だよ。おまけにさ、毎日々々の暮しが、退屈で、ばかばかしくて、鼻もちがならないときている。……ずるずると、泥沼へ引きずりこまれるみたいなものさ。ぐるりにいる連中ときたら、どい

つもこいつも、みんな妙ちきりんなデクの坊ばかりだ。ああした連中と、二年三年と付き合ってみるがいい。知らないうちに段々、こつちまでが妙ちきりんな人間になつてしまふ。これはしよせん所詮、どうにもならない運命だよ。（長い口髭をくちひげひねりながら）いやはや、この髭も、どえらく伸びたもんじやないか。……ばかげた髭さね。もつとも私は、妙てけれんな男になりはしたものの……ばかになつたかというと、まだ必ずしもそうじやない。ありがたいことに、脳みそだけは、まだちゃんとしてゐる。人間らしい感じのほうは、どうやら、だいぶ鈍つてきたようだがね。なんにも欲しくない、なんにも要いらない、誰といつて好きな人もない。……ただしね、あんただけは好きだよ

(乳母の額にキスする)。わたしも子供のころ、ちようどあんたみたいな乳母がいたつけ。

マリーナ 何かめしあがりませんか。

アーストロフ いいや、欲しくない。この春の初め、伝染病のはやつている、なんとかいう村へ行ったことがあつたつけが。：

：発疹はっしんチフスというやつでね。……百姓家は、軒なみに、病

人がごろごろしているんだ。……いやその不潔なこと、臭いこと、煙たいこと。ゆかべたには仔牛こうしが、病人と同居しているし

……仔豚までそのへんを、うろうろしている始末なのさ。……

そこでまる一日いちんち、あくせく働いて、ちよいと一服するまもないし、これっぽっちの物を、口へ入れる暇もなかった。やつと

こさで、家へ帰^{うち}つてみると、やっぱり休ましちやもらえない。

——鉄道から、線路工夫を一人かつぎこんで来てね、手術をしてやろうと、そいつを台の上へ寝かしたら、やつこさん、クロロホルムにかかったなり、ころりと死んじまったじゃないか。ところが、よけいな時に人間らしい感情が、ここんところ

(胸をおさえて) 目をさましてね、まるでその男を、わざと殺しでもしたみたいに、気が咎^{とが}めるんだ。……そこで私は坐^{すわ}りこんで、こう目をつぶつて——こんなことを考えたよ。百年、二百年あとから、この世に生れてくる人たちは、今こうして、せつせと開拓者の仕事をしているわれわれのことを、ありがたいと思ってくれるだろうか、とね。ねえ、ばあやさん。そんなこ

と、思っちやくれまいねえ。

マリーナ たとえ人間は忘れても、神さまは覚えていてくださいますよ。

アーストロフ ああそうか、ありがとうよ。いいことを言ってくれたね。

ワーニャ登場。

ワーニャ (家から出てくる。おそい朝飯のあとで一寝入りして、だらけた様子をしている。ベンチに腰をおろして、伊達^{だて}なネクタイを直す) そう…… (間) 。ふむ、そう……

アーストロフ よく寝たかい？

ワーニヤ ああ。……ぐつすり（あくびをする）。なにしろ、教授ご夫妻がやってきてからというもの、生活がすっかり脱線しちゃまったよ。……妙な時間に眠ったり、朝飯や昼飯に何やらエタイの知れないものを食わされたり、酒を飲んだり……するのと為すこと、^などうも不健康なことばかりだ。これまでは、暇な時間なんかちつともなくつて、僕もソーニヤも、感心なほどよく働いたものだ。ところが今じゃ、働くのはソーニヤだけで、僕は寝る、食う、飲む。……さっぱりいかん。

マリーナ （頭を振って）すっかり、きまりが変りましたよ。先生さんのお目ざめは十二時なのに、サモワールは朝からシユン

シユン沸いて、お出ましを待っているんですからねえ。あのご夫婦が見えない時分は、おひるは世間なみに、いつも一時前でしたのに、今じや六時を過ぎる始末ですよ。よる夜なか、先生さんは本を読んだり物を書いたりなさるもので、突拍子もない二時ごろに、いきなりベルが鳴りだす騒ぎ。……なにご用で、旦那さま？ お茶だ！ と、こうですよ。そこで下の者しもを起して、サモワールの支度。まったく、結構なきまりになったものですよ。

アーストロフ まだ当分、ここにいるつもりなのかね。

ワーニャ (ヒューと口笛を吹いて) 百年ぐらいね。やつこさん、ここに居坐る肚はらなのさ。

マリーナ 現に今だつても、サモワールはもう二時間もこうしてあるのに、皆さん散歩にお出かけですよ。

ワーニヤ やあ、来た来た。……心配無用だ。

話し声がきこえて、庭の奥から、散歩帰りのセレブリヤコーフ、エレーナ、ソーニヤ、テレーギンが出る。

セレブリヤコーフ じつにいい、じつにいい。……まさに絶景だ。
テレーギン すばらしい眺めですよ、御前さま。

ソーニヤ あしたは、森の番小屋のほうへ行ってみましようね、

お父さま^{とう}。いいでしょう？

ワーニャ 皆さん、お茶ですよ。

セレブリヤコフ いや済まないが、お茶はわたしの書斎へ持ってきてくださらんか。今日はまだ、二つ三つ仕事があるから。

ソーニャ あのへんの眺めも、きつとお気に召しましてよ。……

エレナ、セレブリヤコフ、ソーニャ、家へはいる。テレーギンはテーブルに近づき、乳母の傍に坐る。

ワーニャ こんなに蒸暑い日だというのに、わが大先生は外套がいとうを召して、オーバシユーズをはいて、コウモリを持って、手袋まではめてござる。

アーストロフ　つまり、健康に注意しているというわけだ。

ワーニヤ　だがあの人は、なんて美人だろう。すばらしい美人だ。生れてこのかた、僕はあれほどの器量の人に会ったことがない。テレーギン　ねえ、マリーナさん。わたしは野原へ出てみても、

こんもり茂った庭を歩いて、このテーブルを眺めても、言うに言われぬ仕合せな気持がしますよ。うつとりするようなお天氣だし、小鳥はさえずってるし、みんなはこうして、仲よく平和に暮してるし、——この上なんの文句がありませんよ。（コップを受けながら）ありがとう、ご馳走ちそうになります。

ワーニヤ　（夢みるように）あの目つき。……なんとも言えない女だ。

アーストロフ 何かいい話はないかい、ええ、ワーニャ君。

ワーニャ (だるそうに) いい話って？

アーストロフ 何か、耳新しいことでも。

ワーニャ ないね。旧態依然たりさ。僕なんざ、相も変らぬ元の
奎阿弥もくあみだよ。いや、ひよつとすると、かえって悪くなってるか

もしれん。なにしろ怠け癖がついちまって、さっぱり仕事もせ
ずに、もうろく親爺おやじみたいにな、ぼそぼそ言ってるだけだからな

あ。お次に、うちの老いぼれ婆ばあさん——つまり、お袋さんとき
たら、十年一日、明けても暮れても婦人解放論さ。片足は棺かんの

桶けへ突っこんでるくせに、のこる片っぱの足じゃ、新しい生

活あけぼのの曙をめぐして、むずかしい本のページを、せつせとほつつ

き回ってるんだ。

アーストロフ 教授閣下は？

ワーニヤ ああ、大先生か。やつこさんは、相変らず朝から夜中まで書齋にとじこもって、何やら書いてござる。

眉まゆに皺しわよせ知恵をしぼって、

朝から晩まで歌を書く、歌を書く。

されど、この身も、わが歌も、

褒ほめられたこと 絶えてなし。

ってなわけさ。がりがり書かれる紙こそ、いい面つらの皮だよ。いっそのこと、自叙伝でも書いたほうが、よっぽどましだろうにね。こいつはまったく、すばらしい題材だぜ。停年でやめた大

学教授でさ、いいかい、カサカサの乾パンでさ、おまけに学のある棒鱈ぼうだらときている。……しかも痛風やみで、リョーマチで、頭痛もちで、その上やつかみと焼もちとで、肝臓肥大症ときている。……その棒鱈がさ、死んだ、前の細君の地所へ、しぶしぶながら転がりころこんで来た。それというのも、都会ぐらしが、ふところところに合わないからさ。やつこさん、自分ほど恵まれない不遇な男はないと、年じゆうこぼしてばかりいるが、じつのところは、あれほど運のいい男は、まあ滅多にないね。(いらいらした調子で)ほんとだよ。なんて運のいい奴やつだ！ たかが寺男の倅せがれがさ、官費で勉強させてもらって、まんまと博士号だの教授の椅子だのにありついてさ、やがて親任官に成りあがった

挙句あげくに、枢密院すうみつゐん議員のむこさんに納まった、等々といった次第だからなあ。いや、まあ、そんなことはどうだっていい。考
えなくちやならないのは、次の点だ。それはね、まる二十五年
のあいだ、やれ芸術だの、やれ文学だのと、書いたり説教した
りしてきた男が、そのじつ文学も芸術も、からつきしわかち
やれないという事実だ。やつこさん二十五年のあいだ、やれり
アリズムだ、やれナチュラリズムだ、やれくしやくしやイズム
だと、人様の考えを受売りして来ただけの話さ。二十五年のあ
いだ、あいつが喋しゃべったり書いたりして来たことは、利口な人間
にはとうの昔からわかりきったこと、ばかな人間にはクソ面白
くもないことなんで、つまり二十五年という月日は、夢幻ほうま抱

沫つに等しかったわけなのさ。だのに、やつうぬぼの自惚れうぬぼようはどう

だい。あの思いあがりようはどうだい。こんど停年でやめてみれば、あいつのことなんか、世間じや誰ひとり覚えちやいない。名もなにもありやしない。つまりさ、二十五年のあいだ、ままと人さまの椅子いすに坐すっていたわけだ。ところが見たまえ、あいつはまるで、生神さまみたいに、そっくり返かえっていていやがる。アーストロフ いやどうも、君はやっかんでるね。

ワーニャ ああ、やっかんでるとも。それでいて、あいつの女運のいいことはどうだ。いかなドン・ファンだって、あいつほどの女運には恵まれなかつたものなあ。あいつの先妻だつた僕の妹は、おとなしい、すばらしい女で、まるであの青空のように

清らかで、氣高くつて、大らかで、あいつの弟子どもよかもつと沢山、崇拜者があつたものだ。しかも、まるで天使のような美しい清らかな愛を、あの男にささげていたものだ。あいつのしゆうと姑さん、つまり僕のお袋は、いまだにあいつを崇拜している。

つまり、あいつめ、こわもてしているというわけだ。おまけに、あいつの後妻ときたら、君も今さつきごらんとおりの、才色兼備の女性だが、その女までが、すでに老境に入ったあいつの嫁になつて、あつたら若さと、美貌びぼうと、自由と、輝きを、ささげてしまったのだ。妙な話さ。さつぱりわからん。

アーストロフ あの一との身持ちはいいのかね。

ワーニヤ 残念ながら、さよう。

アーストロフ なぜ残念なんだい。

ワーニヤ なぜって、あの女の身持ちたるや、徹頭徹尾うそつぱちだからさ。うわべばかり飾り立てて、さつぱり筋が通つちやいない。厭いやで厭いやでならない老おいぼれ亭主だが、さりとして浮気するのも女の道にはずれる。そのくせ、みじめな我が身の若さと、生きた感情を殺すことは、決して不道德じやない。

テレーギン (泣き声で) ワーニヤ、それを言わないでくれよ。頼むよ、ほんとに。……現在の妻なり夫なりに背そむくのは、つまり不実な人間で、やがては国に叛そむくことにも、なりかねないんだよ。

ワーニヤ (腹だたしげに) 口をしめろ、ワツフル。

テレーギン　まあ、お聞きよ、ワーニヤ。わたしの女房は、このわたしの男っぷりに愛想をつかして、婚礼のあくる日、好きな男と駆落ちしてしまった。けれどわたしは、その後も自分ごの自分に、そむいたことはないよ。今になるまでわたしは、あれが好きだし、実をつくしてもいるし、できるだけは援助もしてやっている。あれと好きな男のあいだにできた娘の養育費に、わたしは財産を投げ出してしまったんだよ。そのため、わたしは不仕合せにやなったが、気位だけは、ちゃんとなくさずにいる。ところが、あの女はどうだ。若さとも、おさらばだ。人間のご多分にもれず、器量も落ちてしまう。好きな男には、死なれてしまう。……いったい何が残ったろうね。

ソーニャとエレーナ登場。しばら暫くしてヴォイニーツカヤ夫人、本を手にして登場し、腰をおろして読む。乳母が茶をすすめると、見もしないで飲む。

ソーニャ（気ぜわしく乳母に向って）ばあや、百姓たちが来るのよ。行って、話しておくれな。お茶は、あたしがするから……（茶をつぐ）

乳母退場。エレーナはコップを取り、ブランコに腰かけて飲む。

アーストロフ　（エレーナに）わたしは、ご主人の診察に伺ったのです。あなたのお手紙によると、ご主人はリョーマチやら何やらで、大そう具合が悪いとのことでしたが、案外びんぴんしておられるじゃありませんか。

エレーナ　昨晚はだいぶ、むずかりましてね。脚が痛むと言つておりましたが、今日はもうけろりとして……

アーストロフ　ところがわたしは、取るものも取りあえず、八里の道を飛ばして来たのです。いやなに、かまいません。何もこれが最初の経験というわけでもないですからね。その代り今夜は、お宅に泊めて頂いて、せめても思う存分、眠らせて頂くと

しましよ。

ソーニャ そうなさるといいわ。お泊りになるなんて、滅多にないことでももの。おひる、まだなんでしょう。

アーストロフ ええ、じつはまだなんです。

ソーニャ ちょうどいいわ、召し上がってくださいませね。うちではこの頃、お昼は六時すぎなんですのよ。（お茶を飲んで）

まあ、冷たいお茶！

テレーギン サモワールの温度は、非常に低下しております。

エレーナ 結構よ、イワン・イワーヌイチ、冷たくても頂きましようよ。

テレーギン 失礼ですが……。わたくしは、イワン・イワーヌイ

チじやなくて……イリヤ・イリイーチと申しますんで。……イリヤ・イリイーチ・テレーギン、一名、ワツフルと申しますのは、このとおりのあばた面だもので、口の悪い人がつけた仇名あだななのでございます。わたくしは、その昔、そのソーニヤちゃんの名付親になったことがありますし、ご主人の教授閣下にも、かねがねじっこんご昵懇じっこんに願っております。目下のところ、このお屋敷内にご厄やっかい介かいになっておりますので……お目にとまりましたかどうか、とにかく毎日一緒に食事をさせて頂いている者でございます。

ソーニヤ　テレーギンさんは、よく私たちの仕事をすけてくださって、大切な片腕なんですよ。（優しく）小父さん、おあけ

なさいな、もう一杯ついであげましょう。

ヴオイニーツカヤ夫人 おお！

ソーニャ どうかなすつて、おばあさま。

ヴオイニーツカヤ夫人 アレクサンドルに言うのを忘れたよ……
どうも覚えが悪くなつてね……今日、ハリコフのパーヴェルさ
んから手紙が来たのさ。……こんど出しなすつたパンフレット
を、送つてくだすつたんだよ。……

アーストロフ 面白いものですか。

ヴオイニーツカヤ夫人 面白いけれど、なんだか妙な気もします
よ。七年まえ、さんざん肩を持った説を、今度は否定していな
さるんだからね。呆あきれたものですよ。

ワーニヤ　なあに呆れることはないでせ。まあ、お茶でもあがつたら、お母さん。

ヴオイニーツカヤ夫人　でもわたしは、話がしたいんだよ。

ワーニヤ　だが、私たちはこれでもう五十年も、のべつお喋りしゃべをしたり、パンフレットを読んだりして来たじやありませんか。

いいかげんでもう、やめてもいい時分ですよ。

ヴオイニーツカヤ夫人　お前は、どういうわけだか、わたしの話を聞くのがお厭いやと見えるね。悪かったらあやまるけれど、ジャン、お前はこの一年のうちにつきり変ってしまったて、今じゃ別な人を見るような気がしますよ。……以前は、ちゃんとした信念のある、明るい人間だったか。……

ワーニャ ええ、そうですね！ 僕は明るい人間でしたが、そのくせ誰一人として、明るくしてはやれなかった。……（間）この僕が明るい人間だった。……これほど毒つ気の強い皮肉は、ほかにちよつとないな。僕もこれで四十七です。去年までは僕もあなたと同じように、あなたのその屁理屈へりくつでもって、わざと自分の目をふさいで、この世の現実を見まい見まいとしていたものです、——そして、それでいいのだと思っていました。ところが今じゃ、一体どんなざまになっているとお思いです！ 僕は、腹が立って、いまいましくって、夜もおちおち眠れやしない。望みのものがなんでも手にはいったはずの若い時を、ぼやぼや無駄にすごしてしまって、この年になった今じゃ、もう

何ひとつ手に入れることができないんですからねえ！

ソーニヤ　ワーニヤ伯父さん、面白くないわ、そんなお話！

ヴォイニーツカヤ夫人　（息子に）お前は自分の昔もっていた信念を、なんだか怨^{うら}みに思っておいでのようなだね。……けれど、悪いのは信念ではありません、お前自身なのだよ。信念そのものはなんでもない、ただの死んだ文字だということを、お前は忘れていたのです。……仕事をしなければならなかったのですよ。

ワーニヤ　仕事ですって？　だが人間みんながみんな、物を書く自動人形になれるとは限りませんからね、——あなたの教授閣下みたいだねえ。

ヴオイニーツカヤ夫人 それは一体なんのこと？

ソーニャ (哀願するように) おばあ様！ ワーニャ伯父さん！

後生ですから！

ワーニャ 黙るよ。黙って、あやまるよ。

間。

エレーナ いいお天気だこと、きょうは。……暑くもなし。……

間。

ワーニャ こんな天気にも首をくくつたら、さぞいいだろうなあ。

……

テレーギン、ギターの調子を合せる。マリーナ、家のまわりを歩きながら庭鳥を呼ぶ。

マリーナ どう、とうとうと……

ソーニャ ばあや、百姓たちは何しに来たの？

マリーナ 相変わらず一つことですよ、あの荒地のことですよ。とう、とうとうと……

ソーニャ 何を呼んでるのさ。

マリーナ　ぶちのめんどり鶏が、ひよつ子を連れて、どこかへ行つて
しまつたんですよ。……からす鴉にさらわれなけりやいいが……（退
場）

テレエギン、ポルカを弾ひく。一同だまつて聞き入る。下男
登場。

下男　お医者さまはこちらですか。（アーストロフに）おそれい
ります、アーストロフ先生、お迎えが参りました。

アーストロフ　どこからだい。

下男　工場こうばからで。

アーストロフ（いまいましたげに）ありがたい仕合せだ。とにかく、行かなきゃなるまい。……（帽子を目で捜す）ちえつ、いまましい……

ソーニヤ　ほんとに、お気の毒ねえ。……工場のご用が済んだら、おひるをあがりいらしてくださいね。

アーストロフ　いいや、^{おそ}晩くなるでしょう。どうして……とてもとても……（下男に）君すまないが、ウオトカを一杯たのむよ。ほんとにさ。（下男退場）どうして……とても……とても……

（帽子を見つける）オーストローフスキイのなんとかいう芝居にね、ばかでつかい口髭を生^はやした、さっぱり能のない男が出てくるが。……僕がつまりそれだな。では皆さん、失礼します。

……（エレーナに）もしそのうち、このソーニャさんと一緒に、わたしのところへもお立寄り願えたら、ほんとに嬉しく存じます。地所といつても僅かなもので、三十町歩そこそこですが、まあご興味がありませんでしたら、三百里四方どこを捜してもないような、模範的な庭と、苗木の林をごらんに入れます。うちの地所の隣に、官有林がありましたね。……その森番が年寄りで、おまけに病気ばかりしているものですから、実際のところ、この私が、何から何まで采配さいはいをふっているようなものです。

エレーナ あなたが大そう森や林のお好きな方だということは、もう承っておりますわ。それはもちろん、たいへん世の中のた

めになることには違いないでしょうけれど、でもご本職の邪魔にはなりませんこと？　だって、お医者さまでらっしゃいますものね。

アーストロフ　何がわれわれの本職か、ということは、神さまだけがご存じです。

エレーナ　で、面白くていらっしゃる？

アーストロフ　ええ、面白い仕事です。

ワーニャ　（皮肉に）すこぶるね！

エレーナ　（アーストロフに）あなたはまだ、お若くてらっしゃるわ、お見受けするところ……そうね、三十六か七ぐらい。だから本当は、おっしゃるほどには面白がってらっしゃらないの

よ。しよつちゆう森や林のことばっかり。それじゃあんまり単調だとあたし思うわ。

ソーニャ いいえ、それがとても面白いんですの。アーストロフさんは毎年まいねん々々、あたらしい林を植えつけて、そのご褒美ほうびにもう、銅牌どうはいだの賞状だのを、もらっていらつしやいますの。

古い森が根絶やしにならないように、いつも骨折つてらつしやるんです。このかたの話をとつくりお聞きになったら、きつとなるほどとお思ひになりましたよ。ドクトルのお説すべだと、森林はこの地上を美しく飾って、美しいものを味わう術すべを人間に教え、おおどかな気持を吹きこんでくれる、とおつしやるんですの。森林はまた、きびしい気候を和やわらげてもくれます。気候の

おだやかな国では、自然との闘いに力を費やすことが少ないので、したがってそこに住む人間の性質も、優しくて濃こまやかです。そういう土地の人間は、顔だちが好よくつて、しなやかで、ものに感じやすく、言葉はみやびやかで、動作はしとやかです。ここでは学問や芸術が栄え、哲学も暗い色合いを帯びず、婦人にたいする態度も、上品で優美です。……

ワニーヤ（笑いながら）いや、ブラボー、ブラボー……お説は一々ごもつともだが、疑問の余地もなきにしも非あらずだね。だからね（とアーストロフに）僕だけには一つ、相変らずストーブに薪まきをくべたり、材木を使って小屋を建てたりすることを、お許しねがいたいものだね。

アーストロフ ストープなら泥炭でいたんを焚たけばいいし、小屋なら石で造ればいいじゃないか。もつとも、必要とあらば、木を伐きり出すのに反対はしないが、わざわざ森を根絶やしにする必要が、どこにある？ 今やロシアの森は、斧おのの下でめりめり音を立てているよ。何十億本という木が減びつつあるし、鳥やけもの棲家すみかは荒されるし、河はしだいに浅くなつて涸かれてゆくし、すばらしい景色も、消えてまた返らずさ。というのも、人間というやつが元来無精者で、腰をまげて地面から焚物たきものを拾うだけの才覚がないからさ。(エレーナに)そうじゃないでしようか、ねえ、奥さん。あれほど美しいものをストープで燃しちまつたり、われわれの手では創つくり出せないものを滅ぼしてしまうよう

な乱暴は、よつぽど無分別な野蛮人ででもない限り、できるはずはありませんよ。人間は物を考える理性と、物を創り出す力とを、天から授かっています。それでもつて、自分に与えられているものを、ますます殖やして行けという神さまの思おぼしめ召しなんです。ところが、今日こんにちまで人間は、創り出すどころか、ぶち毀こわしてばかりいました。森はだんだん少なくなる、河は涸れてゆく、鳥はいなくなる、気候はだんだん荒くなる、そして土地は日ましに、愈いよいよ々ますます瘦やせて醜みにくくなってゆく。(ワ―ニヤに)そらまた君は、例の皮肉な目で僕を見ているね。僕の言うことは残らずみんな、君には真面目まじめに受けとれないんだ。もつとも……もつとも、こうしたことは実際のところ、正気の

沙汰さたじやないかもしれん。しかしね、僕のおかげで、伐採うの憂う目きめをまぬかれた、百姓たちの森のそばを通りかかったり、自分の手で植えつけた若木の林が、ざわざわ鳴るのを聞いたりすると、僕もようやく、風土というものが多少とも、おれの力で左
右できるのだということに、思い当るのだ。そして、もし千年のち人間が仕合せになれるものとすれば、僕の力も幾分はそこらに働いているわけなのだ、そんな気がしてくるのだ。白し樺らかばの若木を自分で植えつけて、それがやがて青々と繁しげつて、風かぜに揺られているのを見ると、僕の胸は思わずふくらむのだ。そして僕は……（下男がウオトカのグラスを盆ひらにのせてくるのを見て）だがしかし……（飲む）もう行かなければならん。ま

あ結局のところは、こんなことは一切、正気の沙汰じゃないか
もしれないがね。ではご機嫌よう、皆さん！（家のほうへ行
く）

ソーニヤ（彼と腕を組んでいつしよにゆく）今度はいつおいで
になつて？

アーストロフ わかりませんな。……

ソーニヤ また、ひと月もしてから？……

アーストロフとソーニヤ、家の中へはいる。ヴォイニーツ
カヤ夫人とテレーギンが、テーブルのそばに残る。エレー
ナとワーニヤは、ベランダのほうへ行く。

エレーナ　ワーニャさん、またあなたは、やんちゃぶりを発揮なすったのねえ。わざわざ自動人形なんてことを言いだして、お母さまの気を悪くしないじやいられないのね！　けさの食事の時も、またアレクサンドルと言い合いをなさるし、つまらないことだわ。

ワーニャ　だがもし、わたしが本気であの人を憎んでいるとしたら！

エレーナ　アレクサンドルを憎むなんて、意味ないことよ。あの人だって、べつに変わった人間じやないんですもの。あなたより悪い人でもなし。

ワーニヤ　もしもあなたが、自分の顔や、自分の立ち居振舞いを、われとわが目で見られたらなあ。……あなたは生きているのが、じつに大儀そうですね！　じつになんとも、大儀そうですね！　エレーナ　ええそりやあ、大儀でもあり、退屈でもありますわ！　みんな寄つてたかつて、宅の悪口ばかり言つて、あたしを気の毒そうな目で見るのよ。可哀かわいそうに、あんな年寄りの亭主を持つてさ、と言わんばかりにね。そういつて同情してくださる気持——それは本当によくわかるの！　現にさつき、アーストロフさんも仰おつしやつたとおり、あなたがたはみんな、分別もなく森を枯らしてばかりいるので、まもなくこの地上は丸坊主まるぼうずになつてしまふんだわ。それと同じように、あなたがたは、分

別もなしに人間を枯らしているので、やがてそのおかげで、この地上には貞節も、純潔も、自分を犠牲にする勇氣も、何ひとつなくなってしまうでしょうよ。どうしてあなたがたは、自分のものでもない女のこと、そう気に病むんでしようねえ。わかっていますわ、それはドクトルの仰おつしやるとおり、あなたがたは一人のこらず、破壊とやらの悪魔をめいめい胸の中に飼ってらっしゃるからなのよ。森も惜しくない、鳥も、女も、お互い同士の命も、何ひとつ大事なものはなし。……

ワーニャ 僕、そんな哲学は嫌きらいですよ！ （間）

エレーナ あのドクトルは、疲れきったような神経質な顔をしてらっしゃるわね。いい顔だわ。ソーニャはどうやら、あの人が

好きで、恋しているらしいけれど、その気持はあたしにもわかるの。あたしが来てから、あの人はもう三度もここへ見えただれど、あたしは内気なたちだもので、一度もゆつくりお話ししたこともないし、やさしい言葉一つかけてあげたこともない。ずいぶん意地の悪い女だと、思ってたらしやるでしょう。ねえワニーヤさん、あなたとあたしがこんなに仲がいいのも、きつと二人とも陰気くさい、わびしい人間だからなんでしょうね！
ほんとに私たち、陰気くさいわ！ そんなに人の顔を見るものじゃなくてよ。あたしそんなこと嫌い。

ワニーヤ　じゃあほかに、どんな眺めようがあるというんです、
こんなにあなたが好きなのにさ！　あなたは、わたしの悦びでよろこ

す。わたしの命です、わたしの青春です！ そりやもちろん、
思い思われるという見込みがほとんどなくて、まずゼロに等し
いことぐらい、よく心得ています。が僕は、何もいらぬ。た
だあなたの顔を眺め、あなたの声を聞くことさえできれば……
エレーナ しつ、人が聞きますよ！ （家へはいろいろとする）
ワーニャ （あとを追いながら）好きだと言ったつていいじゃあ
りませんか。どうぞそう邪慳じゃけんにしないでください。それだけ
でもう、僕はほんとに仕合せなんです。……

エレーナ ああ、困ったわ。……（二人、家の中へ消える）

テレーギン、ギターの弦を打って、ポルカを弾く。ヴォイ

ニーツカヤ夫人はパンフレットの余白に何やら書きこんでいる。

—幕—

第二幕

セレブリヤコフ家の食堂。——夜。——庭で夜回りが拍ひ
ようしぎ
子木を打つ音。

セレブリヤコフ、あけ放した窓の前の肘ひじかけ椅子いすにかけ
て、まどろんでいる。

エレーナ、その傍そばで、やはりまどろんでいる。

セレブリヤコフ (目がさめて) 誰だ、そこにいるのは? ソ

ーニヤかい？

エレーナ あたしですよ。

セレブリヤコーフ レーノチカ、お前か。……どうも、たまらな
いほど痛むよ！

エレーナ 膝^{ひざ}かけが、床^{ゆか}へ落ちてるわ。（両足をくるんでやる）
いかがアレクサンドル、窓をしめましようか。

セレブリヤコーフ いいや、息苦しくてならん。……今しがた、
うとうとしたら、妙な夢を見たよ。わたしの左脚が、人のもの
になってしまったのさ。あんまり痛むので目がさめた。いや、
こいつは痛風じゃない、どつちかといえば、リョーマチのほう
だ。今なん時だね？

エレーナ 十二時二十分すぎ。(間)

セレブリヤコフ 朝になったら、図書館でバーチュシコフの全集を捜してみておくれ。たしか、うちにあつたと思うが。

エレーナ ええ？

セレブリヤコフ 朝になったら、バーチュシコフを捜してくれ、
というんだよ。たしか、あつたような気がする。だが、なんだ
つて、こう息苦しいんだろうなあ？

エレーナ お疲れだからですよ。これでふた晩も、おやすみにな
らないのですもの。

セレブリヤコフ ツルゲーネフは、痛風から扁桃腺へんとうせんが腫れたは
という話だ。わたしも、そうならなければいいが、まったく、

年をとるということは、じつになんともはや厭いやなことだな。いまましい。年をとるにつれて、われとわが身がつくづく厭になるよ。お前たちだってみんな、このわたしを見るのが、さぞ厭だろいなあ。

エレーナ 年をとった年をとったって、まるでそれが、あたしたちのせいみたいに仰おっしやるのね。

セレブリヤコフ さしずめお前なんか、いちばんわたしを見るのが厭な組だろいなあ。

エレーナ 立ちあがって、少し離れたところに腰をおろす。

セレブリヤコーフ お前がそう思うのも、無理はないさ。わたしもばかじゃないから、そのぐらいのことはわかる。お前は若くて、健康で、器量よしで、生きる望みに燃えている。なのに、わたしは老いぼれで、まずもって死人も同然だ。今さら、どうしようもないじゃないか？ そのへんのが、わからんわたしだとも言うのかね？ そりやもちろん、わたしがこの年まで生きてきたのは、ばかげたことさ。だが、もう暫くしばらの辛抱だ。じきにお前たちみんなに、厄介払いさせてやるからな。そういつまで、ぐずぐずしているわけにもゆくまいからなあ。

エレーナ あたし、病気になつてしまう。……後生だから、何もおっしやらないで。

セレブリヤコフ お前の言うことを聞いてみると、まるでわたしのせいでみんな病気になって、退屈して、せつかくの若い盛りを虫ばまれているのに、このわたしだけが生活を楽しんで、なに不足なく暮しているように聞えるね。うん、まあ、そんなこつたろうね！

エレーナ 何もおつしやらないでよ！ まるで責め殺されるみたいだわ！

セレブリヤコフ どうせそうだよ、みんなわたしに責め殺されるのさ。

エレーナ (泣き声で) ああ、たまらない！ だから、このあたしに、どうしろと仰しやるの？

セレブリヤコーフ 別にどうとも。

エレーナ それじゃ、もう何もおつしやらないでよ。後生だから。

セレブリヤコーフ 妙な話じゃないか。あのワーニャだの、脳み

その腐ったお袋さんだのが喋りだすと、みんな一も二もなく、

黙って拝聴するが、わたしが一言でも口を利こうものなら、

すぐみんな白けた顔をするんだ。声を聞いても、ぞつとすると

いうやつだ。なるほど、わたしは厭なやつで、がりがり亡者

で、暴君かもしれない。——だがそれにしたって、わたしはこ

の年になってまで、自分の意見を持ちだすいささかの権利もな

いと、いうのだろうか？ わたしは、それだけの値打ちもない

男なのだろうか？ どうだね、わたしは気楽な老後を送る権利

もなければ、人様にいたわってもらふ資格もない人間なのかね。
エレーナ 誰も、あなたの権利のことなんぞ、とやかく言つてや
しないわ。（窓が風にあおられてボタンとしまる）風が出てき
た、窓をしめましょう。（しめる）一雨来そうだわ。誰もあな
たの権利のことなんぞ、とやかく言つてやしないわ。

間。夜番が庭で拍子木を打ち。鼻はなうた唄をうたう。

セレブリヤコフ わたしは一生涯、学問に身をささげ、書齋に
なじみ、講堂に親しみ、れつきとした同僚たちと交際してきた
ものだ。——それが突然、いつのまにやら、こんな墓穴みたい

なところへ追いこまれて、来る日も来る日も、愚劣なやつらを見たり、くだらん話を聞かなければならんのだ。……わたしは生きたい、成功がしたい、有名になって、わいわい言われたい。ところが、ここときた日にや、まるで島流しみたいなものじゃないか。のべつ幕なしに、昔のことをなつかしがったり、他人の成功を気に病んだり、死神の足音にびくついたりする。……ああ、たまらん！ やりきれん！ だのにここの連中は、わたしの老後を、いたわつてもくれないのだ！

エレーナ もう少しの辛抱よ。もう五、六年もすれば、あたしもお婆ばあさんになりますわ。

ソーニヤ登場。

ソーニヤ お父さま、あなたはご自分で、アーストロフ先生を呼べと仰しやったくせに、いざあの方が見えると、会おうともなさらないのね。失礼よ。人さまにご迷惑をかけっぱなしで……セレブリヤコーフ お前さんのアーストロフなんか、わたしになんの用がある？ あの男の医学の知識は、わたしの天文学ぐらいなところだろうて。

ソーニヤ まさかお父さまの痛風のため、医科大学の先生総出で、来ていただくわけにもゆきませんわ。

セレブリヤコーフ あんなとうへんぼく唐変木とは、わたしは話もしたくな

いよ。

ソーニャ どうぞご勝手に。(坐る^{すわ}) わたし一向かまいません。

セレブリヤコーフ なん時だね？

エレーナ 十二時すぎ。

セレブリヤコーフ どうも息苦しい。……ソーニャ、テーブルの上の水薬を取っておくれ。

ソーニャ はい。(水薬をわたす)

セレブリヤコーフ (いらだつて) ええ、それじゃない！ 用事ひとつ頼めやしない。

ソーニャ そう駄々をこねないでちょうだい。そんなこと、人によつては好きかもしれないけれど、わたしは、真つ平ご免です

わ！ わたし、そんなお相手をしている暇はないの。明日は草刈だから、早起しななければならないの。

ワーニヤ、部屋着すがたで、蠟燭ろうそくを持って登場。

ワーニヤ いよいよ一荒れくるぞ。（稲妻）そうら来た。エレナさんもソーニヤも、向うへ行っておやすみ。僕が代るから。セレブリヤコーフ（おびえたように）いや、それは困る！ この人のお相手だけは勘弁してくれ。喋りしゃべだしたら最後、きりがないから。

ワーニヤ しかし、この連中だって、休ませてやらなきやいけま

せんよ。これでふた晩も寝ていないのですからね。

セレブリヤコフ ああ、勝手に行つて寝るがいい。だが君も行ってくれたまえ。後生だ。お願いだ。昔のよしみに免じて、このまま引取つてくれたまえ。あとでまた話そう。

ワーニャ (冷笑を浮べて) 昔のよしみか……昔のね……

ソーニャ およしになつて、ワーニャ伯父さん。

セレブリヤコフ (妻に) ねえ、お前。たのむから、この人と二人つきりにしないでおくれ！ 喋りだしたら、際限がないからね。

ワーニャ こうなると、むしろ滑稽こっけいだよ。

マリーナ、蠟燭を手に登場。

ソーニヤ はやく寝たらいいのにさ、ばあや。もう晩いおそのよ。

マリーナ サモワールがまだ出しつ放しになっていきますもの。おいそれと寝られも致いたしませんよ。

セレブリヤコフ みんな寝られないで、へとへとなのに、わたし一人、泰平樂を並べているわけだな。

マリーナ (セレブリヤコフに近寄って、やさしい声で) いかがですか、旦那だんなさま。お痛みですか？ わたくしも、この脚あしがやはり、ずきずきしておりますよ。(膝掛を直してやる) このご病気も、ずいぶん久しいことでございますね。ソーニヤちゃ

んの母御の、亡なくなつたヴェーラさまだつても、幾晩も寝ずに、苦勞なすつたものでございましたよ。……あのとおりの旦那さま想いでらつしやいましたからねえ。……（間）年寄りというもの、子供も同じこと、いたわつてもらうのが何よりの慰めなのに、誰ひとり年寄りなんぞ、いたわつてくれる人はありませんよ。（セレブリヤコーフの肩に接吻する）さ、旦那さま、お寢床へ参りましょう。……さあさあ、参りましょう。……菩ぼ提だい樹じゆの花のお茶を、入れて差上げましょう、おみ足を温ぬくめて差上げましょう。……よくおなりになるように、神さまに祈つて差上げましょう。……

セレブリヤコーフ（感動して）ああ行こう、ばあや。

マリーナ わたしくだつても、この脚が、ずきずきいたしますよ……ずきずき。(ソーニヤと共に教授を連れてゆきながら) 亡くなつたヴェーラさまは、しよつちゆう気をもみなすつて、涙をこぼしておいででしたよ。……このソーニヤちゃんも、あのころはまだ、ほんとにお小さくつて、頑^{がん}是^ぜなくつて。……さあさ、おいでなさいまし、旦那さま。……

セレブリヤコフ、ソーニヤ、マリーナ退場。

エレーナ あの人のおかげで、へとへとだわ。今にも倒れそうだわ。

ワーニャ あなたは、あの人のおかげ。ところが僕は、ほかならぬ僕自身のおかげで、すっかりへとへとですよ。これでもう三晩も寝ないんですからね。

エレーナ おかしな家ですことね、ここは。あなたのお母さまは、パンフレットとお婿むこさんのほかはいっさいお嫌い、そのお婿さんとかんしやくいったら、癩か癩んばかり起して、あたしを信用してくれず、あなたの前でびくびくしているし。ソーニャはソーニャで、父親に当り散らすばかりか、あたしにまでぷりぷりして、これでもう二週間も口を利きいてくれません。あなたはどうかというと、宅がお嫌いで、現在のお母さまをてんでばかにしてらつしやる。あたしはもう気がいらいらして、今日なんか、二十ペン

も泣きたくなつたわ。……おかしな家ですことね、ここは。

ワーニヤ 哲学はよみましょう。

エレーナ ねえ、ワーニヤさん、あなたは教育のある、頭のできたかたですから、おわかりのはずだと思いますけど、この世の中を滅ぼすのは、強盗でも火事でもなくって、むしろ怨み^{うら}だとか憎しみだとか、そういったごくつまらないいざこざなのですわ。……ですからあなたも、不平ばかり仰しやらずに、みんなを仲直りさせる役にお回りになるといいわ。

ワーニヤ じゃ、まず第一に、この僕を僕自身と仲直りさせてください。ああ、エレーナさん……（彼女の手に唇^{くちびる}を当てようとする）

エレーナ いけません！ （手を振りはなす）あちらへいらして！

ワーニャ もうじき雨もあがるでしょう。そして草も木もあらゆるものが生き生きとよみがえって、胸いっぱい息をつくことでしよう。しかし僕だけは、あらしも神鳴りも、心の曇りを洗い落してはくれないのだ。自分の一生はもう駄目だ、取返しがつかない、という考えが、まるで主か魔物ぬしのように、よる昼たえまなしに、僕の胸におつかぶさっているのです。過ぎ去った日の、思い出もない。くだらんことに、のめのめと浪費してしまつたからです。じゃ現在はどうかと言うと、いやはやなんともはや、なつちやいない。それでも僕は生きていますつもりです。

これでも僕は、人間らしい愛情を持っているつもりです。だがそれを、一体どうしたらいいんです？ どうしろとおっしゃるんです？ 僕の間人らしい気持は、まるで穴ぼこに射さした陽ひの光のように、むなしく消えてゆくんです。そして僕という人間も、自滅してゆくんです。

エレーナ あなたが、その愛だの愛情だのという話をなさると、あたしはなんだかぼうつとしてしまって、どう言ってもいいかわからなくなるわ。済まない——とは思いますが、何ひとつ申しあげることができないの。（行こうとする）おやすみなさい。

ワーニヤ （立ちふさがって）それだけじゃありません。この家

のなかで、もう一つの命——そのあなたの命が、やっぱりじりじりと虫ばまれてゆくを見ると、僕はもう居ても立ってもいられないんです。一体あなたの行く手に、どんな望みがあるというのです。ろくでもない哲学で、自分の命をちぢめるのは、もういいかげんにしましょう。それがわかったら、ねえ、それがわかったら……

エレーナ（じつと男の顔を見る）ワーニャさん、あなた酔ってらっしゃるのね！

ワーニャ そうかもしれない、そうかも……

エレーナ ドクトルはどこ？

ワーニャ あっちです……僕の部屋に泊っています。ふむ、そう

かもしれない、大いにそうかもしれない。……何がもちあがるか、わかったものじゃないからなあ！

エレーナ 今日もまた、お飲みになったのね！ 一体どういうおつもり？

ワーニヤ 少しは、生きてるような気がしますからね、飲むと。

……ほつといてください、エレーナさん！

エレーナ 以前は、一滴もあがらないし、そんなお喋り屋さんでもなかつたあなたなのに。……さ、あちらへいらして、おやすみなさい！ あなたの相手は、退屈ですわ。

ワーニヤ (また女の手に唇を当てようとする) わたしの大事な……エレーナさん！

エレーナ（腹だたしげに）さわらないでちようだい。ほんとに厭だこと。

退場。

ワーニャ（一人）行つてしまった。……（間）死んだ妹のところで、おれは十年前、ちよいちよいあの人に逢つたものだ。あ
の人は十七で、おれは三十七だった。なんだつておれはあの時、
あの人に恋して、さつさと結婚を申込まなかつたのだろう。造
作もなかつたのになあ！ そうすれば、今はもうちゃんと、あ
の人はおれの細君なのになあ。……そう。……さしずめ今ごろ

は、二人ともあのどしや降りて目をさまして、あの人が神鳴りの音におびえると、おれはしつかり抱きしめてやって、「大丈夫だよ、僕がついてるからね」——そう囁ささやいてやる。ああ、すばらしい夢だ。じつにすてきだ、思わずにつこりしたくなるほどだ。だが、いかんいかん、おれはまた頭の中がこんぐらかつてきたぞ。……なぜおれは年をとってしまったのだ？ なぜおれの気持があの人に通じないのだ？ あの飾り気たつぷりの言い回し、カビの生えた女大学式な考え、世の中を滅ぼすものとかなんとかいう、愚にもつかない屁理屈——いやはや、じつにやりきれん。(間) それにしてもおれは、まんまと一杯くつたものだなあ！ あの教授閣下を——あのやくざな痛風やみを、

おれは心底しんそこから崇拜して、まるで牛みたいにやつのために働いてきたのだ！ おれはソーニャと二人で、この地所から、最後の一しずくまで搾しぼり上げてしまった。おれたちは高利貸みたいなまねまでして、胡麻ごまの油だの、豌えんどう豆まめだの、チーズだのを売りさばいて、自分たちは食う物も食わずに、一銭二銭の小銭から何千という金を積み上げて、あいつに仕送りしてやったのだ。おれは、あいつやあいつの学問が自慢で、それがおれの生き甲斐がいでもあれば励みでもあったのだ！ あいつの言うことと書くこと、みんなおれにはすばらしい天才的なものに思えた。……ふん、ところが今はどうだい。あいつがいざ退職してみれば、あいつが一生かかって何をやり上げたか、今じやすつかり

見透しだ。あいつが死んだあと、一ページの仕事だつて残るものか。あいつは名もない馬の骨だ、ゼロだ！ シャボンの泡だあわ！ おれはまんまと騙だまされたんだ……今こそわかった——きれいさっぱり騙されたんだ。……

アーストロフがチョツキもネクタイもなしのフロック姿で登場。一杯機嫌である。あとからテレーギンが、ギターをかかえて出る。

アーストロフ　おい、弾ひけよ！

テレーギン　皆さん、おやすみじゃないか。

アーストロフ いいから弾けつたら。

テレーギン、そつと弾く。

アーストロフ (ワーニャに) 君ひとりかい？ ご婦人はいないのかね？ (腰に手を当てがって、小声で唄う) 「家鳴り震動、ペチカも踊る、亭主やどこにも、寝られない」……ってね。僕は神鳴りのおかげで目がさめちまった。ひどい降りだったね。もう何時だろう！

ワーニャ 誰が知るもんか。

アーストロフ なんだか、エレーナさんの声がしていたようだが。

ワーニヤ ついさつきまで、ここにいたよ。

アーストロフ まったく、ようちよう窃窕たる美人だなあ。(テーブル

の上の薬壇びんを改めてみる) みんな薬だ。あらんかぎりの処方、
ずらり行列してるわけだ。ハリコフのも、モスクワのも、トウ
ーラのも。……あの人の痛風のおかげで、泣かされなかつた町
は一つだつてあるまい。ほんとに病気なのかい、それとも仮病
かい。

ワーニヤ 本物さ。(間)

アーストロフ ばかに沈んでるじゃないか。教授が気の毒だとで
も言うのかい？

ワーニヤ ほつといてくれ。

アーストロフ それとも、教授夫人に恋こいわずら患いかね。

ワーニャ あの人は僕の親友だ。

アーストロフ おや、もう？

ワーニャ その「もう」というのは、どういう意味だ。

アーストロフ 女が男の親友になるまでには、こういう手順があるものだ。——はじめは友達、それから恋人、さてその先が親友。

ワーニャ 俗物哲学だ。

アーストロフ へえ？ いや、なるほど。……白状すりゃあ、僕もそろそろ俗物の仲間入りさ。現にこのとおり、結構酔っぱらいもするしね。まあ大抵ひと月に一度は、こんなふうに深酒を

する。そして、酔っぱらったが最後、僕は思いつきりもう、ずうずうしい鉄面皮になる。僕の目には世の中が一切いっさいがっさい合財、一文の値打ちもなくなってしまうんだ。うんとむずかしい手術にも平気で手をつけて、ものの見事にやっつてのける。どえらい未来の計画を、でつち上げてみたりもする。そうなるともう、自分がただの唐変木とは思えなくなつて、天晴れ人類あっぱに偉大な貢献をすべき人物に見えてくる……偉大なる貢献をね！ そうなつたらもう、僕独特の堂々たる哲学体系が出現して、君たち仲間みんな、虫けらか微生物みたいに見えてくる。(テレーギンに) ワツフル、弾けよ。

テレーギン そりや、あんたの頼みだから、わたしや喜んで弾く

けどね、まあ考えてもごらん、——家^{うち}じゆうみんな寝てらっしやるじゃないか。

アーストロフ　まあ弾けつたら！

テレーギン、そつと弾く。

アーストロフ　もう一杯やらなきや駄目だ。行こう。あつちにはまだ、コニヤツクが残っていたはずだ。そして夜が明けたらすぐ、僕の家へ行こうじゃないか。いいね？　うちの助手のやつはね、「いいね」とは決して言わない、きまつて「よかね」つて言うんだ。おつそろしい強^{ごうつくば}突張^ばりでね。じゃ、よかね？

(はいつてくるソーニヤを見て) これは失礼、ネクタイもしないで。(急いで退場。テレーギンあとに従う)

ソーニヤ まあ、ワーニヤ伯父さん、またドクトルとお飲みになったのね。どっちもどっちだわ。でも、あの方は今に始まったことじゃないけれど、一体どうなすつたの、あなたは、いい年をして、おかしいわ。

ワーニヤ 年なんか関係ないさ。本当の生活がない以上、幻に生きるほかはない。とにかく、何も無いよかまじだからね。

ソーニヤ 草刈はすっかり済んだというのに、まいにち雨ばっかり、せつかくの草がみんな腐りかけているわ。だのにあなたは、幻を追うのがご商売なのね。うちの仕事を、すっかり投げだし

ておしまいになったのね。……働くのは私つきり、精も根も尽きてしまったわ。……（驚いて）あら伯父さん、涙なんか！

ワーニャ なあに、涙なもんか。なんでもないよ……つまらんことさ。……今お前さんが私を見た目つきが、亡なくなったお前のお母さんにそっくりだったのさ。可愛かわいいソーニャ……（むさぼるように、姪めいの手や顔にキスする）ああ妹……おれの可愛い妹……お前は今どこにいるんだ？ あれが知ってくれたらなあ！

ああ、あれが知ってくれたらなあ！

ソーニャ 何を？ 伯父さま、何を知ってくれたらと仰しやるの？

ワーニャ つらいんだよ、苦しいんだよ。……いや、なんでもな

い。……やがて……いやなんでもない。……どれ、行くとしよ
うか……（退場）

ソーニヤ（ドアをノックする）アーストロフさん！ 起きてら
っしやる？ ちよつとお願い！

アーストロフ（ドアの向うで）ただいま！（やや暫くして登
場。ちゃんとチョツキとネクタイをつけている）何かご用です
か。

ソーニヤ どうせお好きなものなら、ご自分だけでお飲みになる
といいわ。ただお願いですから、伯父には飲ませないでくださ
いましね。あの人には毒ですから。

アーストロフ わかりました。もう一緒にはやりますまい。（間）

私は今すぐ家へ帰ります。思い立ったが吉日ですからね。馬車に馬をつけているうちに、そろそろ明るくなるでしょう。

ソーニャ 雨が降っていますわ。朝までお待ちになったら。

アーストロフ 神鳴りは、それで行きました。降られたにしても、大したことはありませんまい。どれ、出掛けるとしましょう。あらためてお願いしておきますが、今夜はもう、お父さまのころへ私をお呼びにならないでください。私が、痛風だと申しあげると、お父さまはリョーマチだと仰しやる。寝てらっしゃいと言うと、起きてらっしゃる。今日なんかは、てんでもう口も利きいてくださらん始末ですからねえ。

ソーニャ 甘やかされつけているものですから。(食器棚の中を

捜す）何かちよつとめしあがりませんか？

アーストロフ　そうですね、頂きましようか。

ソーニヤ　私は、夜なかに頂くのが好きですの。何か戸棚のなかに、ありますわ。父は若い頃から、ずいぶん女の人にもてたそうですね、ありがとうございます。父は若い頃から、ずいぶん女の人にもてたそうですね、ありがとうございます。父は若い頃から、ずいぶん女の人にもてたそうですね、ありがとうございます。

このチーズ、いかが？　（二人とも食器棚の前に立つて食べる）

アーストロフ　私は今日、なんにも食べずに、飲んでばかりいました。あなたのお父さんは、じつに気むずかしい人ですね。

（棚から酒瓶をおろして）よろしいですか？　（一杯ついて飲

む）ここには誰もいないから、ざつくばらんなお話ができます

が、どうもこのお宅は、わたしにはひとつき一月と我慢ができません

ありませんな。こんな空気のなかにいたら、息がつまってしまいますよ。……あなたのお父さんときたら、痛風と書物のお化けみたいな人だし、ワーニャ伯父さんは鬱ふさぎの虫にとりつかれてめそめそしてるし、お祖母ばあさんもあのとおり、それから、あなたのままおつ母さん……

ソーニャ 母がどうかしました？

アーストロフ 人間というものは、何もかも美しくなくてはいけません。顔も、衣いし裳しょうも、心も、考えも。なるほどあの人は美人だ、それに異存はありません。けれど……じつのところあの人は、ただ食べて、寝て、散歩をして、あのきれいな顔でわれわれみんなを、のぼせあがらせる——それだけのことじゃあり

ませんか。あの人には何ひとつ、しなければならぬ仕事がない。あべこべに、人の世話にばかりなっているんです。……：：：：うでしよう？　しかし、無為安逸な生活は、清らかな生活とは言えません。（間）もつとも私の見方は、すこしきびしすぎるかもしれない。私も、お宅のワーニヤ伯父さんと同様、生活に不満なのです。それで二人とも、だんだん愚痴っぽくなってくるんですよ。

ソーニヤ　ほんとに生活にご不満？

アーストロフ　そりや一般的に言えば、私も生活が好きです。けれどわれわれの生活、この田舎いなかの、ロシアの、俗臭しんそこふんぷんたる生活は、とても我慢けんがならないし、心底しんそこから軽蔑けいべつせざる

を得ませんね。そこで、じゃお前自身の生活はどうなんだ、と言われると、正直の話、なんともかとも、何ひとつ取柄はないですねえ。ねえ、そうでしょう、まっくらな夜、森の中を歩いてゆく人が、遥か彼方はるかなたに一点のともしびの瞬またたくのを見たら、どうでしょう。もう疲れも、暗さも、顔を引つかく小枝のとげも、すっかり忘れてしまうでしょう。……私は働いている——これにご存じのとおりです。この郡内で、私ほど働く男は一人だつてないでしょう。運命の鞭むちが、小止おやみもなしに私の身にふりかかって、時にはもう、ほとほと我慢のならぬほど、つらい時もあります。だのに私には、遥か彼方で瞬ともしびいてくれる燈灯ともしびがないのです。私は今ではもう、何ひとつ期待する気持もないし、

人間を愛そうとも思いません。……もうずっと前から、誰ひとりとして好きな人もないのです。

ソーニヤ　誰ひとり？

アーストロフ　ええ、誰ひとり。ただ、ある種の親しみを、お宅のばあやさんには感じています——昔なじみとしてね。ところが百姓連中ときたら、じつに単調で、無知蒙昧もつまいで、不潔きわまる暮しをしているし、インテリ連中はどうかというと、これもまた、どうも反りそが合わない。頭が痛くなるんですよ。つきあい仲間のインテリ連中は、誰も彼も、料簡りようけんは狭いし、感じ方は浅いし、目さきのことしか何も見えない——つまり、どだいもうばかなんです。一方、少しは利口で骨のある手合いは、

ヒステリーで、分析きちがいで、反省反省で骨身をけずられています。……そうした手合いは、愚痴をこぼす、人間嫌いを標ひょう ようぼう ようぼうする、病的なほど人の悪あつこう口をいう、人に近づくにも横合いから寄って行って、じろりと横目で睨にらんで「ああ、こいつは気持ちがいだよ」とか、「こいつは法螺ほら吹きだよ」とか決めてしまう。相手の額に、どんなレッテルを貼はっていいかわからなくなるよ、「こいつは妙なやつだ」と言う。私が森が好きならこれも変てこ。私が肉を食べないと、これもやつぱり変てこ。いや、今日こんにちではもう、自然や人間に向って、じかに、純粹に、自由に接しようとする態度なんか、薬にたくもありません。……あるものですか！（飲もうとする）

ソーニヤ　（さえぎつて）いけません、どうぞお願いですから、もうあがらないで。

アーストロフ　なぜです。

ソーニヤ　まるであなたに似つかないことですもの！　あなたは、すつきりしたかたで、とても優しい声をしてらっしゃるわ。：

：わたしの知っている誰よりも彼よりも、ずっとりっぱなかたですわ。だのに、なぜあなたは、飲んだくれたり、カルタをしたり、そんな凡人のまねがなさりたいの？　ね、そんなまねはなさらないで、お願いですわ！　いつもあなたはおっしゃるじやないの、——人間は何ひとつ創つくり出そうとせずに、天から与えられたものを毀こわしてばっかりいる、つて。なぜあなたは、な

ぜあなたは、ご自分でご自分を台なしになさるの？ いけない

わ、いけませんわ、後生です、お願いですわ。

アーストロフ （片手を差出して）もう飲みますまい。

ソーニャ 約束してくださいさる？

アーストロフ 約束します。

ソーニャ （ぎゅつと手を握って）ありがとう！

アーストロフ これで打ちどめです！ やつと迷いがさめました。

そら、このとおり、私はすっかりもう正気だし、死ぬ日までこれで押し通しますよ。（時計を見て）じゃ、もう少しお話しま

しょうか。僕に言わせるとですね、僕の時代はもう過ぎてしまつて、今じゃ何もかも手後おくれなんです。年はとるし、働はたらきすぎ

てへとへとだし、俗物にはなるし、感情はすっかり鈍ってしま
うし、今ではもう僕は、とても人間とは結びつけそうもありません。
現に僕は、誰ひとりとして好きな人はないし、これから
先も……好きな人はできません。そんな僕の心を、まだ捉え
る力があるのは、ほかでもない、美しさというものです。なん
ぼ僕だって、これだけには、平気じゃいられません。仮にもし
あのエレーナさんが、その気になったとしたら、僕の頭を一日
でわけなく狂わしてしまうでしょうね、……だがこれは、愛で
はない。結びつきというものでもない。……（片手で両眼をお
おい、身ぶるいする）

ソーニヤ どうかなすって？

アーストロフ いやなに。……この春の初め、僕の患者が、クロホルムにかかったまま死んじゃったつけ。

ソーニャ そのことなら、もうお忘れになってもいい時分よ。

(間) ねえ、どうお思いになる、アーストロフさん。……仮にもし私に、仲のいいお友達か、それとも妹があつて、その人が……まあ仮に、あなたのことを想つておもいるとしたら、——それがわかつたら、あなたはどうなすつて？

アーストロフ (肩をすくめて) わかりませんね。まあ、どうもしないでしょうね。それとなしに、僕は愛することなんかできないし、……それに第一、そんなこと考えている暇もないことを、その人に悟らせるように仕向けるでしょうね。それはそう

と、帰るとすれば、もう時間です。ではご機嫌よう、ソーニヤさん、こんな調子で話していたら、それこそ夜が明けてしまいますよ。（握手）もしよろしかったら、客間を抜けさせて頂きたいですな。ひよつとしてワーニヤ伯父さんにつかまるといけませんからね。（退場）

ソーニヤ（一人）あのかたは、なんにも言ってくださらなかったわ。……あのかたの心も胸の中も、相変らず私には見当がつかない。だのに、なぜ私は、こんなに嬉しいうれ気持がするんだらう？（幸福そうに笑う）わたしはあの人にとってあげた——あなたはすつきりした、上品なかたで、とても優しい声をしてらっしゃる、って。……なんだか出し抜けのように聞えはしな

かったかしら？　いまだに私の耳のなかで、あのかたの声がふるえながら、優しくいたわってくださいるような気がする……ほら、この空気のなかに、あのかたの声がただよっている。でも、あの妹のことを言いだしたら、あのかたはわかってくださいさらなかつたわ……（両手をもみしだきながら）ああ厭だ厭だ、どうして不器量に生れついたんだろう！　ほんとに厭なこと！　しかも私は、自分の不器量さかげんをよく知っているわ、ようく知っているわ。……こないだの日曜、わたしが教会から出てきたら、みんなで噂うわさをしているのが聞えたつけ。「あのかたは親切で、優しい人だけれど、惜しいことに器量がね」って……不器量……不器量……不器量……

エレーナ登場。

エレーナ (窓をあけて) 雨があがったわ。まあ、いい空気だ
と！ (間) ドクトルはどこ？

ソーニヤ お帰りになりました。 (間)

エレーナ ねえ、ソフィー。

ソーニヤ なんですの？

エレーナ 一体いつまで、あなたはそんな顔をしているつもり？

お互い、何ひとつ根に持つことなんかないじゃないの。どう
して敵^{かたき}同士にならなきゃいけないの？ もう沢山だわ。……

ソーニャ わたしだつて……（エレーナを抱きしめる）憤慨する
のはもう沢山。

エレーナ それでなくちや嘘うそよ。（二人とも感動のさま）

ソーニャ お父さま、おやすみになつて？

エレーナ いいえ、客間で起きてらつしやるの。……ほんとにこ
れで、もう何週間も口を利きかずにいたわねえ。べつにこれとい
つて、わけもいわれもないのにさ……（食器棚のあいているの
を見て）おや、どうしたの？

ソーニャ アーストロフさんが、お夜食をあがつたの。

エレーナ 葡萄酒ぶどうもあるわ。……仲直りのしるしに、ひとつ飲ま
ない。

ソーニヤ ええ、いいわ。

エレーナ このグラスで一緒にね。……（つぐ）そのほうがいいわ。じゃ、これでもう、ママと言ってくれるわね。

ソーニヤ ええ。（飲んでキスする）わたし、ずっと前から仲直りがしたかったの。でも、なんだか恥ずかしくって……（泣く）エレーナ おや、何で泣くの？

ソーニヤ なんでもないので、ついわたし。

エレーナ さ、もういいわ、もういいわ……（泣く）おばかさんね、あたしまで、泣いちゃったじゃないの。……（間）あんたは、あたしがソロバンずくであんたのお父さまの後妻に来たように勘ぐって、それで憤慨していたのね。……でもあたし、誓

つて言うけれど、あたしがあの人のところへ来たのは、ただ好きだったからなのよ。あの人が学者で、有名な人だということで、あたし夢中になってしまったの。そりやもちろん、そんなもの本当の愛じゃなくて、いいかげんなものには違いないけれど、あのころは本物のような気がしたのよ。あたしのせいじゃないわ。だのにあんたは、あたしたちが結婚したそもそも初めから、その利口な疑ぐりぶかい目を光らせて、ずっとあたしを咎とがめていたのね。

ソーニャ もう仲直りよ、仲直りよ！ 忘れましょうよ。

エレーナ そんなふうに見るものじゃないわ——あんたにも似合わない。誰もかも、みんな信じてゆかないことには、とて

も生きちや行けないものよ。(間)

ソーニヤ　ねえ、本当のところを聞かせてくださらない、仲好なかよし
になつたんだから。……ママ、お仕合せ？

エレーナ　いいえ。

ソーニヤ　やっぱり、そうだったのね。じゃ、もう一つ。かくさ
ずにおっしゃってね——パパがもつと若かつたらと、お思いに
なる？

エレーナ　あんた、まだ子供ねえ。そりや、そう思うわよ。(笑
う)　さ、なんでもいいから、どしどし聞いてちようだい。……

ソーニヤ　あのドクトル、いい人だとお思ひになつて？

エレーナ　ええ、とても。

ソーニャ（笑う）わたし今、ぼうつとばかみたいな顔をして
いるでしょう……ね？ あのかた、さつきお帰りになったのに、
わたしにはまだ、あのかたの声や足音が聞えるのよ。あの真つ
暗な窓を見ても、あのかたの顔が浮んでくるの。どうぞ、みん
な言わせてちょうだい。……でも、とてもこんな大きな声じゃ
言えないわ、恥ずかしいんですもの。わたしの部屋へ行つて、
お話ししましょうよ。ばかな娘だと思いになる？ きつとそ
うだわ。……でもあの人のこと、何か話して聞かせて。……
エレーナ 何かつて、なあに？

ソーニャ 頭のいいかたね、あのかた。……何もかも心得てらつ
しやるし、何もかもおできになるんですもの。……病人を治し

たり、森を植えつけたり……

エレーナ　植林だの医術だのということは、じつは大した問題じゃないのよ。……ねえ、いいこと、——肝心なのは、有能だということなのよ！　この有能だというのが、どういふことだからあんな知ってて？　何ものをも怖れない勇氣、何ものにも捉とらわれない頭の働き、こせこせしない遠大な物の見かた……だわ。木を一本植えるにしたって、千年たったら、それがどうなるかということ、あの人はちゃんと考えていて、人類の幸福というものはつきり眼に浮べてらっしゃるのよ。ああいう人は滅多にいません、だから大事にいたわってあげなければならぬ。……お酒を飲んだり、たまさか乱暴な真似まねをするといつて、

——なんでもないじゃないの。有能な人はこのロシアじゃ君子然とすましちやいられないものなのよ。考えてもみるがいいわ、あのドクトルの生活ときたら、はたから見てもぞつとするほどじゃなくて？ 道路といえ、二進にうちも三進さうちも行かないぬかるみだし、身を切るような風、ふぶき、行けども行けども涯はてしない道のり。おまけに相手にする百姓たちときたら、がさがさした、けだものみたいな連中ばかりだし、ぐるり一面どこを見ても、貧乏と病氣なんだもの。そんな中で、来る日も来る日も一所懸命闘っている人に向つて、四十近くまでお酒も飲まずに君子然と構えているなんて、虫がよすぎると言うものだわ。……（娘に接吻せつぶんする）あたしは、心からあんたの幸福を祈るわ。だつ

てりっぱにその値うちのある人なんだもの。……（立ちあがる）
それに引きかえ、このあたしは、どこから見ても退屈な、ほん
の添え物みたいな女なのよ。……音楽をやっても、お嫁に来て
みても、浮いた噂が立つ時でも——いつどんな場合でも、要す
るにあたしは、ほんの添え物みたいな女なのだわ。ほんとを言
うと、ねえソーニヤ、あたしほど不合せな女はないと、つく
づく思うの！（興奮して舞台をあちこち歩き回る）あたしに
は、この世の合せなんか似つかないのよ。ええ、似つかない
のよ！ おや、何を笑うの？

ソーニヤ（顔をかくして笑いながら）わたし、ほんとに嬉しい
の……嬉しいの！

エレーナ ああ、ピアノが弾きたくなつた。……何か弾いてみよ
うかしら。

ソーニャ ええ、弾いて。(抱きしめる) わたし、どうせ眠れや
しないわ。……何か弾いて!

エレーナ ええ、いいわ。でもお父さん、起きてらっしゃるのよ。
例のご病気がはじまると、ピアノが癩かんに障さわつてならない人なの。
ちよつと行つて、伺つてみるといいわ。かまわないとおっしゃ
つたら弾くから。ね。

ソーニャ ええ、伺つてくるわ。(退場)

庭で夜番の拍子木ひょうしぎの音。

エレーナ ずいぶん長いこと弾かなかつた。思いつきり弾いて泣いてみよう、ばかみたいに泣いてみよう。(窓をのぞいて) カチカチ言わせているのは、お前かい、エフイーム。

夜番の声 へえ、あつしで。

エレーナ 鳴らさないでくれ、旦那さまだんながお悪いんだよ。

夜番の声 すぐ向うへ参りやす！ (口笛を吹く) おいで、黒、

黒、おいで！ (間)

ソーニヤ (帰ってきて) いけませんって！

—幕—

第三幕

セレブリャコフ家の客間。右手、左手、中央と三つの出入口。——昼。

ワーニャとソーニャが腰かけている。エレーナは何か思案しながら、舞台を歩き回っている。

ワーニャ 教授閣下からのお達しによると、われわれ一同、きょう午後一時に、この客間に集まれとのことだったが。（時計を

見て）もう一時十五分前だ、何かわれわれたみくさ民草にみことのりがくだるわけだな。

エレーナ 何か用向きがあるんでしよう。

ワニーヤ あの人の、用向きも何もあるものか。世迷よまいごとを書く、ぼそぼそ苦情をいう、やきもちを焼く、それだけのことさ。

ソーニヤ （咎とがめるような口調で）伯父さん。

ワニーヤ いや、ご免ご免。（エレーナをさして）どうだい、あの人は。歩くにも、さももの憂うそうに、しやなりしやなりとやっている。いい風情ふぜいだなあ、じつに！

エレーナ あなたこそ、一日じゆう、ぼそぼそ言つてらつしやるわ。のべつぼそぼそ言つていて——よくも厭あきずにいraftしや

れるものねえ！（さびしそうに）あたし、退屈で死にそうだわ。一体どうしたらいいんだろう。

ソーニャ（肩をすくめて）仕事なら、いくらでもあつてよ。する気にさえおなりになれば。

エレーナ 例えば、どんなこと？

ソーニャ 帳簿をつけるなり、百姓の子に物を教えるなり、療治をしてやるなり。仕事はいくらでもありますわ。現にあなたもお父さまもまだここにいらつしやらなかつたころは、わたしワ
ーニャ伯父さんと一緒に、よく市場いちばへ粉を売りに行ったもので
すわ。

エレーナ そりや無理よ。あたし、そんな興味もないしね。お百

姓に物を教えたり、療治をしてやるなんて、理想派の小説に出てくるだけの話だわ。第一あたしが、やぶから棒に思い立って、教えたり療治したりに出かけていくなんて、とてもできない相談だわ。

ソーニヤ どうして出かけていって、教えてやる気におなりになれないのか、わたしにはそれがわからないわ。まあ見てらっしゃい、今に平気になりますから。（エレーナを抱きしめる）退屈はからだの毒よ、ねえママ。（笑いながら）あなたは退屈で、身の置き場もないご様子ですけれど、退屈がってぶらぶらしている人がいると、はたの人にまでうつるものなのねえ。論より証拠、このワーニヤ伯父さんは、いちんち一日じゆう何もせず、ま

るで影みたいにあなたの後ろばかり追っかけているし、わたしだつてこのとおり、仕事も何もほつたらかして、ママのところへお話に来てしまふでしょう。怠け癖がついたんだわ、しようのないわたし！ あのアーストロフ先生だつて、前はごくたまにしかお見えにならず、せいぜい月に一度ぐらい、それも無理やりをお願いして来て頂いたものですけれど、今じゃどうでしょう。大事な森も患者も打つちやらかして、毎日ここへ見えないう日はありませんわ。あなたは魔法使よ、きつと。

ワーニャ 何をくよくよなさるんです？ （声を励まして）ねえ、僕の大事なエレーナさん、せつかくそれだけの器量をしてさ、もつと利口になるものですよ！ あなたには、魔性の血が流れ

ている、いつそのこと魔女になっておしまいなさい！　せめて一生に一度は、思いつきりやつてごらんなさい。さあ早く、魔物みたいな男の誰かに、首つたけ惚ほれてごらんなさい。教授閣下をはじめ、われわれ一同が、（両手をひろげて）こう呆あっけ気にとられるぐらい、ずぶりと深みへはまってごらんなさい！

エレーナ　（ムツとして）どうしようと、あたしの勝手ですわ！
 ずいぶん失礼ねえ！　（行こうとする）

ワーニヤ　（引きとめて）まあまあ、エレーナさん、あやまります……赦ゆるしてください。　（手に接せつ吻ぶんして）さあ仲直り。

エレーナ　なんぼなんでも、我慢がならないわ。そうじゃなくて？

ワーニャ　めでたく仲直りのしるしに、今すぐ薔薇ばらの花束を持ってくるとしましょう。今朝はやく、あなたにあげようと思つて作つておいたのです。……秋の薔薇——えも言われぬ、悩ましげな薔薇ですよ。……（退場）

ソーニャ　秋の薔薇——えも言われぬ、悩ましげな薔薇……（二人、窓のそとをながめる）

エレーナ　もう九月なのねえ、結局あたしたち、ここで冬越しをするんだわ！（間）ドクトルはどこ？

ソーニャ　ワーニャ伯父さんのお部屋ですわ。何か書いてらつしやるの。ワーニャ伯父さんが出て行つてくれて、ありがたいわ。わたし、ご相談がありますの。

エレーナ　どんなこと？

ソーニヤ　どんなことつて。（頭をエレーナの胸にうずめる）

エレーナ　もう、いいわ、いいわ……（髪を撫なでてやりながら）
いいわ。

ソーニヤ　わたし、器量が悪いの。

エレーナ　いい髪の毛だこと。

ソーニヤ　あんなことを！（振返つて、鏡を見ようとす）い

いえ、嘘うそよ。女が不器量だと、きまつて、「いい目をしている」

とか、「いい髪をしている」とか言うものだわ。……わたしあ

の人を、もう六年もお慕いしていますの。じつのお母さまより、

ずっと好きなくらい。明けても暮れても、あの人の声が聞える

ような気がするし、あの人の握手が、今でも感じられるの。あの人を心待ちにして、じつと戸口を見ていると、今にもあの人が、はいつてらっしやるような気がするの。ね、もうおわかりでしょう、こうしてしよっちゆうあなたのお邪魔をしにくるのも、あの人の噂うわさがしたいからですわ。このごろはあの人の、毎日のようにここにお見えになるけれど、わたしを見つけてくださるどころか、てんで見向きもなさらないの。……わたし、とてもつらい！ もうこうなつては、とても見込みはないわ、ないわ、ええ、ないわ！（絶望的に）ああ神さま、どうぞ、勇気をお授けくださいませ！……つて、ゆうべは、一晩じゆう、お祈りしましたの。……わたしはちよいちよいあの人のそばへ行

つて、こつちから話をしかけてみたり、じつとあの人の目を見つめたりします。……わたしもう、見得も何も無いし、自分を抑える力もないの。……もう一刻の我慢もなくなつて、きのうワーニヤ伯父さんに、すっかり打明けましたの。……わたしがあの人を慕っていることは、召使たちもみんな知ってますわ。みんな知ってますわ。

エレーナ　で、あの人は？

ソーニヤ　知らないの。てんで見向きもしないんですもの。

エレーナ　（物思わしげに）妙な人だわねえ。……じゃ、こうしましよう。あたしから話してみようじゃないの。……遠回しにそつと謎なぞをかけてみるのよ。（間）ほんとに、いつまでそう、

どっちつかずじゃあねえ。……ね、いいでしょう。

ソーニャうなずく。

エレーナ　ほんとに、それがいいわ。好きか、好きでないか——
それくらいのこと、すぐわかるもの。いいのよ、そんなにそわ
そわ心配しないでも。そつと遠回しに、気取けどられないように聞
くからね。イエスカノウか、それだけわかればいいんだもの。
（間）もしノウだったら、もうここへは来て頂かないことにし
ましようね。そうだね。

ソーニヤうなずく。

エレーナ　いつそ顔を見ないほうが、気が楽なもの。さ、そうと決ったら善は急げ、今すぐ訊きいてみることにしようじゃないの。あの人あたしに、何か凶面を見せたいと言つてたわ。……ちよつと行つて、拝見したいと言つて来てちようだい。

ソーニヤ　（ひどく興奮して）あとで本当のこと、すっかり聞かせてくださる？

エレーナ　そりやもちろんよ。本当のことというものは、いいにしろ悪いにしろ、とにかくどつちつかずでいるより、少しは気が安まるもの。あたしにまかせてちようだい、いい子だから。

ソーニャ ええ、ええ。じゃわたし、あなたが凶面を見たいと言
つてらっしやると、そう言つて来ますわ。……（行きかけて、
ドアのそばで立ち止る）いいえ、やっぱりわからないまままでい
るほうがいいわ。……とにかく、望みだけはあるんだもの……
エレーナ どうしたの？

ソーニャ いいえ、なんでも。（退場）

エレーナ（一人）ひとの胸の中を知りながら、力になつてやれ
ないぐらい、厭いやなことはないわ。（思案しながら）あの人はあ
の子のことを想おもつてはいない、それはたしかだ。だからといつ
て、あの人があの子をお嫁さんにして悪いという理屈いなはないわ。
あの子は器量こそ悪いけれど、あの年配の田舎いな医者には、願つ

たり叶かなつたりの奥さんじゃないの。利口で、思いやりがあつて、
気持がきれいでさ。……いや、こんなことじゃない、こんなこ
とじゃない……（間）あたしには、氣の毒なあの子の氣持がよ
くわかる。どうにもやり場のない退屈なその日その日、あたり
をうろうろしている連中ときたら、人間というよか、いつそ灰
色のポツポツとでも言ったほうが、早わかりがするくらい。耳
に聞える話といったら、俗悪なくだらな話ばかり、ただ食べ
て、飲んで、寝ることしか知らないような連中が、うようよし
ている中へ、時々ああして、ほかの連中とは似もつかない、風ふう
采うさいもよければ話も上手じょうずで、女好きのするあの人があつてく
るんだもの。闇夜やみよに明るい月がのぼつたみたいなものだわ。：

…ぼうつとなつて、無我夢中になるのも無理はない。現にこのあたしだつて、幾分のぼせ気味らしいもの。まったく、あの人が顔を見せないと、なんだか物足りないし、あの人のことを考えると、思わずにつこりしたくなるもの。…あのワーニャ伯父さんは、あたしには、魔性の血が流れている、「せめて一生に一度は思いつきりやつてごらんさい」つて言つたつけ。…

…そうねえ、ひよつとすると、それが本当かもしれないわ。…

…いつそ小鳥みたいに自由になつて、さつさとこんな所から飛び出したら、みんなの寝ぼけつ面つらや、あきあきするような長話が、見えも聞えもしない所へ行つて、きれいさつぱりみんなのことが忘れてしまえたら。でもあたしは気が小さくつて、引つ

こみ思案だから……気が咎^{とが}めて仕方がないだろう。……現にあの人は毎日ここへ出かけてくる。その来るわけが、どうやら察しがついてくると、もうあたしは、まるで自分が悪いみたいない気がして、いつそソーニヤの前に膝^{ひざ}をついて、泣いてあやまりたいような気持になるんだもの。……

アーストロフ　（統計グラフをかかえて登場）ご機嫌よう！

（握手）　図面がごらんになりたいとかいう話ですが。

エレーナ　昨日あなたは、見せてくださるっておっしゃったじゃないくて？……いまお暇ですか？

アーストロフ　ええ、もちろん。（カルタ卓の上に図面をひろげて、^{びょう}鋏でとめる）あなたのお生れは、どちらですか？

エレーナ (手伝いながら) ペテルブルグですの。

アーストロフ 学校はどちらで？

エレーナ 音楽学校でした。

アーストロフ じゃ、こんなもの、つまらないかもしれませぬね。

エレーナ まあなぜ？ そりやあたし、田舎はさっぱり知りませんけれど、本でならずいぶん読みましたわ。

アーストロフ 私は、この家うちにわざわざ自分の机が持つてきてあるんです……ワーニャ君の部屋にね。患者の応対ほでへとへとになって、頭がぼうつとしてくると、私は何もかも放ほつたらかして、いっさんにここへ駆けつけます。そして一、二時間、こんなことをして気を紛らすんです。……ワーニャ君とソーニャさ

んは、算盤そろばんをパチリパチリ言わせている。そのそばで私は自分の机にむかつて、絵具を塗りたくるんです。暖かい落着いた気分で、どこかでコオロギも鳴いている。しかし、こういう楽しみは、そうちよいちよいはやりません。月に一度ぐらいなものです。……（図面を指でさしながら）ではまず、ここをぐらうください。これは五十年前の、この郡の有様です。濃い緑、うすい緑は、森をあらわしたもので、このとおり総面積の半ばを占めています。緑いろのところとところに赤い網目がついているのは、大鹿おおしかや山羊やぎの棲すんでいた場所です。……この図面には、動物ばかりでなく、植物の分布も示してあります。ほら、この湖には、白鳥や、雁がんや、鴨かもが棲すんでいましたし、土地の古老の話に

よると、あらゆる種類の鳥が無慮無数に群棲ぐんせいして、まるで雲のように空を飛んでいたそうです。大小の村のほかに、このとおりここに、出村だの部落だの、坊さんの庵室あんしつだの、水車小屋だのが散らばっています。……牛や馬も、どっさりいました。この水色に塗ってある所がそれです。たとえばこの区域では、水色が濃くなっていますが、これは馬が沢山いた場所で、農家一戸あたり三頭の割合だったそうです。(間)今度は下のほうをごらんください。これが二十五年前の有様です。これになるともう、森は総面積の三分の一しかありません。大鹿はまだいるが、山羊はもういません。緑も水いろも、ずつとうすくなっています。まあざつと、そんな調子です。さあ第三図

へ移りましょう。これは現在の有様です。緑いろはそこかしこに見えますが、一面べつたりというわけではなく、飛び飛びになつています。大鹿も白鳥もヤマドリも、いなくなつてしまいました。……前にあつた出村や部落や、坊さんの庵室や水車小屋は、今では跡形もありません。これを要するに、だんだんと、しかも確実に衰えてゆく有様が、見えているわけで、まあもう十年か十五年もしたら、元も子もなくなつてしまふに違いありません。あなたがたはそれを、やれ文化の影響だとか、古い生活はしぜん新しい生活に席を譲るべきだとか、仰おつしやることではしようね。なるほど、もしもこんなふうに、森が根絶やしになつた跡に、道路が通じ、鉄道が敷けたというのなら、また製粉

所や工場こうばや学校が建ったというのなら、そして住民がずっと健康に、ずっと裕福に、ずっと頭が進んだというのなら、私にもうなずけますが、実際はそんな気配は一つもないではありませんか！ この郡内には、相変らず沼地がのさばっているし、蚊はぶんぶん言っているし、道らしい道はないし、百姓は貧乏だし、おまけにやれチフスだ、やれジフテリアだ、やれ火事だ、という始末なのです。……ところで、なぜそんなふうに悪くなったか、と考えてみると、つまりそれは、力にあまる生存競争の結果なのです。……言い換えると、無気力と無知と、徹底的な無自覚とが、今日こんにちこのような情勢の悪化を招いたそもそもの原因なので、つまり飢え凍えこご、病みほうけた人々が、なんと

か露命をつなぎ、子供を守ってゆくために、いやしくも飢えをしのぎ、身を暖めるたしになるものなら、わつとばかり飛びついて、明日の^{あす}ことなどは考えもせずに、すっかり荒してしまつたわけなのです。……今ではもう、ほとんど完全にぶち^{こわ}毀してしまつたのですが、その代りに^{つく}創り出したものは、まだ何ひとつないのです。（興ざめな口調で）お顔つきで見ると、あまり面白くもなさそうですね。

エレーナ　だってあたし、こういうことよくわからないんですもの。……

アーストロフ　わかるのわからないのというほどのことでもありません、ただあなたには、興味がありません。

エレーナ　ほんとを言いますとね、あたしほかのことに氣をとられていきますの。ご免なさいね。じつはあたし、あなたにちよつと、お訊ききしたいことがあるんですけれど、どうも具合が悪くって、言い出しにくいんですの。

アーストロフ　訊きたいこと？

エレーナ　ええ、お訊きしたいことが。いえなに……ほんの罪のない話なの。ま、ここへかけましょう。(二人かける)　じつはね、ある若い女の人のことなんですの。お互い正直に、お友達として、あけすけにお話ししましょうね。一たんお話がすんだら、もうそれつきり、忘れてしましましょうね。よくって？

アーストロフ　結構です。

エレーナ お話というのは、あたしの義理の娘、ソーニヤのこと
ですの。あなた、あの子好き？

アーストロフ ええ、尊敬しています。

エレーナ 女として好きですか？

アーストロフ (ややためらって) いいえ。

エレーナ じゃ、あとふたことみこと一言三言——それでおしまいにしてよ

うね。あなた、何もお気づきじゃなくて？

アーストロフ 別になんにも。

エレーナ (相手の手をとって) あなたは、あの子のことなんか、
心にかけていらつしやらない。そのお目でわかりますわ。……

あの子ははんもん煩悶しています。……ね、そこを察して……もうこ

こへは、いらつしやらないで頂けませんこと。

アーストロフ（立ちあがる）僕はもう、過去の人間です。……

それに、暇もないし……（肩をすくめる）どうしてそんな暇が？（彼は度を失っている）

エレーナ ああ、なんて厭いやな話だろう。あたしまるで、何千貫もある荷物を背負って歩いたみたいに、胸こゝろがどきどき言っているわ。でもまあ、よかったわ、済んで。じゃあもう、きれいに忘れましょうね、なんのお話もしなかつたみたいだね、そして……そして、もうお帰りになってちょうだい。あなたは頭のいいかただから、察してくださいませわね。（間）あたし、すっかり顔が火照ほてってしまつたわ。

アーストロフ もしひとつき一月かふたつき二月前に、今の話を伺ったのだつ

たら、あるいは僕も考えてみたかもしれません。が、今となつてはもう……（肩をすくめる）それに、あの人が煩悶しているという以上、もちろんそりやあ……。ただ一つ、どうもわからないことがある。どうしてあなたは、わざわざこんなことを、僕に訊いてみる気になったのです？（相手の目をじつと見つめて、指を立てて脅かす）あなたは——ずるい！

エレーナ なんのこと？

アーストロフ（笑いだして）ずるい人ですよ。じゃ、よござんす、仮にソーニヤさんが煩悶しているとしましょう。しかしどうしてそのため、こんな探りをお入れになることがあるんです

？（相手の口を封じながら、早口に）まあ、そんなびつくりしたような顔を、なさらないでください。あなたは、なぜ僕が毎日ここへやってくるのか、そのわけをすつかりご存じなのだ。……なぜ、誰のためにやってくるのか、それをちゃんとご存じなのだ。そんな可愛らしい顔をして、あなたはすばしい獣みたいなんだ。そんな眼をして僕を睨まないでください。どうせ僕は、老いぼれた雀すずめですからね。

エレーナ（けげんそうに）獣みたい？ なんのことやらわから
ないわ。

アーストロフ きれいな、毛のふさふさしたイタチですよ。……
あなたは、餌食えじきがお入用なんだ！ 現にこの僕は、もうこれで

一ト月も怠けどおしに怠けて、何もかも放つたらかして、がつがつあなたの姿を追い回している。それがあなたには、堪たまらなく面白いんです。堪らなくね。……さあ、いかがです？ 僕はこのとおり、きれいにやられました。これは、わざわざ訊くまでもなく、先刻ご承知のはずじやありませんか。（両腕を組み、頭こゝべを垂れて）降参しました。さあどうぞ、存分になすってください。

エレーナ あなた、どうかなすったのね！

アーストロフ （歯をくいしばって笑う）なるほど、内気な人は違つたものだ……

エレーナ まあ、あたしこれでも、あなたが考えてらっしやるよ

り、少しはましな女ですわ！ ええ誓つて。（行くこうとする）

アーストロフ （行く手を遮さへぎつて）僕は今日すぐ家へ帰ります。

もう二度とここへは来ません。が、その代り……（女の手を取つてあたりを見回す）どこかで逢あいましょう。さ早く、どこで逢いましょう？ 誰かくるといけません、早く言つて……（情

熱的に）その眼、その唇……一度だけキスさせて。……そのいい匂においのする髪の毛に、ちよつとキスするだけでいいんです……

…

エレーナ あたし誓つて……

アーストロフ （先を言わせずに）誓うも何もあつたものですか。よけいな文句はいりません。……ああ、この腕、この手！

(両手に繰返し接吻する)

エレーナ　さ、もう沢山、あんまりだわ……出て行ってちょうだい……
い…… (両手を振放す) ひどいかた。

アーストロフ　ね、どう、どうするんです、あしたどこで逢うんです？ (女の胸に手を回す) ね、そうでしょう、もうこうなったら否いやも応もない、どうしたって逢わずにやいられないんだ。
(接吻する)

その時ワーニヤが、薔薇の花束を持って登場、ドアのところで立ちどまる。

エレーナ (ワーニヤに気づかず) ゆるして……放して 頂戴ちようだい

…… (アーストロフの胸に頭を押しつける) いけませんったら

! (行こうとする)

アーストロフ (胸から手を放さず) あした森の番小屋へいらつ
しやい……二時ごろ。ね、いいでしょう、きつと来ますね?

エレーナ (ワーニヤを見て) 放して! (すっかり動顛どうてんして

窓のほうへ身をすさらす) ほんとにひどいわ。

ワーニヤ (花束を椅子いすの上に置き、興奮のていで、顔や襟首えりくび
をハンカチで拭ふく) なんでもないさ。……なあに……なんでも
ないさ。

アーストロフ (ふてくされて) やあワーニヤ先生、なかなかい

い天気だな、きょうは。朝のうちはぐずついて、一雨来そうな空あいだったが、今じや日が照っている。まったくもって、結構な秋になったもんだなあ……秋蒔まきもうまくいつてるし。

(と図面を筒形に巻く)ただ、なんだね、日が短くなりはしたがね。……(退場)

エレーナ (いそいでワーニヤに近寄って)ね、後生だから力を貸してちょうだい。あたしたち夫婦が今日すぐここを立てるよ
うに、あなたの威光でなんとか計らってちょうだい! いいこと?
今日すぐですよ!

ワーニヤ (顔を拭きながら)ええ? ふむ、そう……よろしい。
……僕はね、エレーン、すっかり見てしまった、すっかり……

エレーナ（いらだつて）ね、いいこと？ あたし、どうしても今日、ここを発たつんだから！

セレブリヤコーフ、ソーニヤ、テレーギン、マリーナ登場。

テレーギン 閣下さま、わたくしもどうやら、からだの具合がはつきり致しませんです。これでもう二日もふらふらしておりますので。なんですかっむりがその……

セレブリヤコーフ ほかの連中はどこだね？ わたしはこの家が気に入らんよ。まるで化物屋敷だ。だだっぴろい部屋が二十六もあってさ、すぐみんな散り散りばらばらになってしまう。呼

んだって捜したって、誰ひとり見つかったためしがない。（呼
鈴を鳴らす）大奥さんと若奥さんと呼んできなさい。

エレーナ あたし、ここにおります。

セレブリヤコフ 皆さん、どうぞ席へついてください。

ソーニヤ （エレーナに近づき、もどかしそうに）あのかたなん
ておっしゃって？

エレーナ あとで。

ソーニヤ まあ、^{ふる}顫えてらっしゃるのね？ 気をもんでらっしゃ
るのね？ （探るように相手の顔を見つめる）わかったわ。：

：あのかたもう、ここへは来ないって仰しやったんでしよう：

：ね？ （間）ね、そうでしよう？

エレーナうなずく。

セレブリヤコーフ（テレーギンに）からだの具合のわるいのは、
なんとかまだ我慢のしようがあるが、この田舎の暮しぶりとき
た日にや、わたしにはまったく歯が立たんね。わたしはなんだ
か、地球を踏みはずして、別の星の世界へ落っこちたみたいな
気がするよ。どうぞ皆さん、席についてください。ソーニャ！
（ソーニャは耳にはいらず、悲しそうにうなだれて佇たたずんでい
る）ソーニャ！（間）聞えない。（マリーナに）ばあや、お
前もおかけ。（乳母、腰をおろして靴下を編む）ではどうぞ、

皆さん、ひとつ皆さんのお耳を、注意の釘くぎによく引っかけて頂
きませう。(ひとり笑う)

ワーニヤ (いらいらして) たぶん、僕には用がないでしょうね
? 行つてもいいですか?

セレブリヤコフ いいや、誰よりも君が大切な人なんだよ。

ワーニヤ これはこれは、一体何を仰せおおつかるのかな?

セレブリヤコフ 仰せつかる? ……いや君は、何を怒っている
のだね? (間) もし何か君の氣に障さわることを、わたしがした
のだったら、どうか赦ゆるしてくれたまえ。

ワーニヤ その物の言いつぷりをやめるんですな。さ、本論には
いりませう。……どんな用なんです?

ヴォイニーツカヤ夫人登場。

セレブリヤコフ あ、ちようど母も見えました。では皆さん、始めることにします。(間) 諸君、ここに皆さんをお招きしたのは、ある重大な聞きこみを、皆さんにお伝えせんがためなんです。検察官がいよいよ乗りこんでくるらしいですぞ。いや、冗談はさておき、なかなか重大な問題なのです。こうして皆さんのお集まりを願ったのは、じつは皆さんの協力と助言を仰ぎたいからなのでして、平ぜいの皆さんのご厚誼こうぎに甘えて、わたしの期待は叶かなえて頂けるものと信じております。わたしは学問

をする人間で、書物に埋^{うず}もれているものですから、実生活のほうには、これまですつと疎^{うと}かつたわけです。そこでこの際、世情に通じておられる皆様の知恵を拝借せずには、とても切り抜けることができないので、ワーニヤ君をはじめ、そこにおられるテレーギン君にも、またお母さん、あなたにも、どうか相談に乗って頂きたいのです。……その話というのは、ほかでもないが、何分にもわれわれは「マネット・オムネス・ウナ・ノツクス」、つまりその、老少不定でありますし、ことにわたしはこのとおりの老人でもあり、病身でもあるしするので、この際自分の家族に関する範囲だけなりとも、財産方面の整理をしておくのが、もつとも時宜を得た処置であろうかと考える次第で

す。わたしの生涯はもう終つたも同然ですから、自分一個のことは考えもしません。わたしにはまだ若い家内もあれば、年頃の娘もあります。（間）この田舎で生活を続けてゆくことは、私にはとうていできません。われわれは田舎向きにできた人間ではないからです。かと言って、この地所からあがるだけの金で都会ぐらしをすることも、また同じく不可能です。仮に森の木を売り払うにしても、これは非常手段であつて、毎としその手を使うわけにはゆきません。それでわれわれは、多少とも一定した収入額を永年にわたつて保証してくれるような方法を、なんとか見つけ出さなければならんわけです。ついては、ふと次の方法を思いついたので、ひとつ皆さんのご審議をわずらわ

したい。細かい点は抜きにして、大づかみに説明することになります。まずこの地所は、平均して二分以上の利をあげてはいない。そこでわたしは、これを売り払うことを提案したい。その代金を有価証券へ振りかえれば、四分ないし五分の利をあげることができるわけだし、わたしの考えでは、何千かの余分の金も浮いてくるはず。それがあれば、フィンランドあたりに、小ぢんまりした別荘も買えようというもの。

ワーニヤ　ちよつと待った。……どうも僕は耳が悪くなったようだ。もう一ぺん言ってください。

セレブリヤコフ　代金を有価証券へ振りかえて、残った余分の金で、フィンランドに別荘を買おう、というのです。

ワーニャ　フィンランドのことじゃない。……何かまだほかのことが聞えたが。

セレブリヤコフ　この地所を売り払ったらどうか、と言っているのです。

ワーニャ　そ、それだ。この地所を売り払おうというんですね、よろしい、まったくすばらしい思いつきだ。そこで一体この僕に、年寄りの母や、またこのソーニャをかかえて、どこへ行けというんです？

セレブリヤコフ　そのことなら、いずれまた相談するでしょうじゃないか。そう一どきに話ができない。

ワーニャ　ちよつと待った。どうやら僕は、この年まで常識とい

うものが、ひとつかけらもなかったらしいぞ。今の今まで僕は、愚か千万にも、この地所はソーニヤのものと思つていましたよ。この土地は亡なくなつた父が、僕の妹の嫁入り支度に買つてやつたものです。今の今まで僕は間抜けで、法律のトルコ式解釈というものを知らずにいたもので、この土地は妹からソーニヤに伝わつたものとばかり思つていましたよ。

セレブリヤコーフ そりやいかにも、この地所はソーニヤのものさ。誰がそうでないと言つてゐる？ だからソーニヤの承諾がなければ、わたしだつて無理に売ろうと言やしない。のみならず、わたしがこういう案を持ち出すのも、ソーニヤのためを思えばこそなんだ。

ワーニャ どうもおかしいぞ、愈々もってわからない！ 僕の

気がくるったのか、それとも……それとも……

ヴオイニーツカヤ夫人 ジャン、アレクサンドルに逆らうんじやありません。まかせておおき。この人のほうが、私たちよりよつほど、事の善し悪しをわきまえていなさるんだから。

ワーニャ いや、まあ水を一杯もらおう。(水を飲む) さあ言いたまえ、なんなりと遠慮なく、どしどし言いたまえ！

セレブリヤコーフ どうもわからん、なぜ君はそう興奮するのかね？ わたしだって何も、この目論見が理想的なものだなどと言いはしない。皆さんがいかなというのなら、あえて固執するつもりはないのだ。(間)

テレーギン　（はらはらして）御前さま、わたしは学問というもののにや、ただ敬意を抱いているばかりじゃござんせんで、何かこう、親しみとでもいったような感じを抱いておりますので、はい。と申しますのも、わたくしの弟のグリゴリー・イリイチの家内の兄は、もしやご存じかも存じませんが、コンスタンチーン・トロフィーモヴィチ・ラケデモノフと申しまして、学士でございました……

ワーニヤ　やめろ、ワツフル、大事な話の最中だ。……ま、いいから後あとにしろ……（セレブリヤコーフに）ちようどいい、ひとつこの男きに訊いてごらんなさい。この地所は、この男の叔父貴から買ったんだから。

セレブリヤコーフ やれやれ、今さらそんなこと、聞いたところ
で始まるまい。面白くもない。

ワーニャ この地所は、当時の金にして、九万五千ルーブリで買
ったんだ。父はそのうち、七万しか払わずに死んだから、残る
二万五千は借金になっちまった。さあ、ここんところを、よく
聞いてくださいよ。……僕は大好きな妹のためを思つて、この
土地の相続権を放棄したんだ。さもなければ、この土地は結局、
こうして内のものにはならなかつたはずだ。いや、そればかり
じゃない、僕はこの十年というもの、まるで牡牛おうしみたいに汗水
たらして、その借金をきれいに済なしたんだ。

セレブリヤコーフ しまったなあ、こんな話を持ち出さなけりや

よかった。

ワーニヤ この土地の借金がきれいに片づいて、おまけにちゃん
とここまで、無事に持つてこれたのは、ひとえにこの僕という
人間一個の努力の賜たまもの物なんだ。それを今さら、こんなに年を
取ってしまった僕の首根つこをつらまえて、表へ抛ほうり出そうと
いうんだ！

セレブリヤコーフ 一体どうしたらいいと言うのかね。わたしに
はさっぱりわからん！

ワーニヤ この二十五年のあいだ、僕はこの土地の差配をして、
汗水たらして、せっせと君に金を送ってやった。こんな真正直
な番頭が、どこの世界にあるものか。だのにあんたは、その間

じゆうありがとうの一言も、僕に言ったためしがないじやな

いか。その間じゆう、若い頃も年とつた今も、僕はあんたから、

年額五百ルーブリ也なりの、乞食こじきも同然すてぶちの捨扶持すてぶちを、ありがたく頂ち

ようだい

戴戴しているにすぎないんだ。——しかもあんたは、ただの

ルーブリだつて、上げてやろうと言ったことがないんだ！

セレブリヤコフ ワーニャ君、それは無理難題というものだよ。

わたしは実務にうとい人間だから、この辺のことは全然めくら

なんだ。君は幾らでも好きだけ、どしどし上げてくれたらよ

かったのだ。

ワーニャ ああいつそ、思う存分くすねてやるんだつた。その、
くすねることもできなかつた意気地のない僕を、皆さん、どう

ぞ思いつきり笑ってください。そうするのが本当だったのだ。
それをやれば、乞食の境涯に今さら身を落すこともなかったの
だ！

ヴオイニーツカヤ夫人（きびしく）これ、ジャン！

テレーギン（はらはらして）ねえワーニヤ、およしよ。いい子
だから、およしよ。……わたしや顫えふるがついてきたよ。……永
年のいいつきあいを、今さらぶちこわすこともないじゃないか。
（ワーニヤに接吻せつぶんする）およしよ。

ワーニヤ 二十五年というもの僕は、この母親と顔つき合せて、
まるでモグラモチみたいに、ろくろく表へも出ずに暮してきた
のだ。……われわれの考えることも、われわれの感じることも

——みんな残らず、あんたという一人の人間に寄つかかっていたのだ。昼は昼で、君の噂うわさをし、君の仕事のことを話題にし、君をわれわれの誇りとし、君の名を畏おそれ謹つつしんで口にのぼせていたものだ。夜は夜で、君の雑誌だの本だのを読みふけて、大事な時間をつぶしたものだ。——今じゃそんなもの、洩はなも引っかけやしないがね。

テレーギン およしよ、ワーニャ、およしよ……。聞いちやいられないから。

セレブリヤコーフ (憤然として) わたしにはわからん、一体どうしろと言うのだから。

ワーニャ 君はわれわれにとって、世界で一番えらい人だった。

君の書く論文は、端から暗記していたものだった。……だが、いまこそ目がさめたよ！ 何から何まで見透しさね！ 芸術がどうしたのと書いちやいるが、君にや芸術のゲの字もわかっちゃいないんだ！ かつて僕が愛読した君の本なんか、びた一文の値うちもありやしないんだ！ われわれは、まんまと一杯くわされたのだ！

セレブリヤコーフ 皆さん、この人をなんとかしてくださらんか、いやなんともはや！ わたしは向うへ行こう！

エレーナ ワーニヤさん、いいからもうお黙りなさい！ わかつて？

ワーニヤ いいや黙らん！ （セレブリヤコーフの行く手に立ち

ふさがつて) まだまだ、話は済んじやいない! 君は、僕の一生を台なしにしちまつたんだ! この年まで僕は、生活を味わったことがない、生活をね! 君のおかげで僕は、一生涯でいちばんいい時代を、台なしに、すつてけてんにすつちまつたんだ! 貴様は、おれの不ふぐたいてん俱戴天の敵だ!

テレーギン 聞いちやいられない……聞いちやいられない。……あつちへ行こう……(身も世もあらぬていで退場)

セレブリヤコフ だから、どうしろと言うのかねえ? それに全体、なんの因縁があつて、そんな言いがかりをつけるのだ? ばかばかしい! この地所が君のものなら、勝手に君のものにしたらいじやないか。わたしは別に欲しいとは言わん。

エレーナ あたし、もうこれつきり、こんな地獄は出て行くわ！

(叫ぶ) もう我慢がならない。

ワーニヤ 一生を棒に振つちまつたんだ。おれだって、腕もあれば頭もある、男らしい人間なんだ。……もしおれがまともに暮してきたら、シヨーペンハウエルにも、ドストエーフスキイにも、なれたかもしれないんだ。……ちえつ、なにをくだらん！

ああ、気がちがいそうだ。……お母さん、僕はもう駄目です！
ねえ、お母さん！

ヴオイニーツカヤ夫人 (きびしく) だから、アレクサンドルの言うことを聴くんです！

ソーニヤ (乳母の前に膝ひざまずいて、しがみつく) ばあや！ ば

あや！

ワーニャ お母さん！ 僕はどうしたらいいんです？ よろしい、何も言わないでください！ どうしたらいいか、僕にはちやんとわかってる！（セレブリヤコーフに）畜生、覚えてろよ。
（中央のドアから退場）

ヴォイニーツカヤ夫人、それに続く。

セレブリヤコーフ 諸君、これは一体どうしたことだ、ええ？

あの気がいを、どつかへ引っぱって行つてくれ！ とても一つ屋根の下じゃ暮していけない！ 現にあすこに（と中央のド

アをさして）とぐろを巻いているのだ。隣同士みたいなものなのだ。……どっか村のほうか、それとも離れのほうへでも、あの男を引越させてくれ。さもなけりや、このわたしが出ていく。とてもあんな男と、いつしよに暮すことはできん。……

エレーナ（夫に）あたしたち、今日すぐここを発たちましようよ！ 早速さっそくその支度をさせなければ。

セレブリヤコーフ いやはや、呆あきれはてたやつだ！

ソーニヤ（膝まずいたまま、父のほうへ向きなおる。いらいらと涙声で）お父さま、情けというものを、お忘れにならないでね！ わたしもワーニヤ伯父さんも、ほんとに不合せなんですもの！（みだれる心を押しとどめながら）情けというもの

を、お忘れにならないでね！ 覚えてらっしゃるでしょう。あなたがまだ働き盛りでいらしたころ、ワーニャ伯父さんとお祖母^あさまは、毎ばん夜おそくまで、あなたのために参考書を翻訳したり、原稿の清書をしたり、していらしたものですわ……毎晩々々！ わたしもワーニャ伯父さんも、息つくまもないほど働いて、一文の無駄づかいもしまいとびくびくして、みんなあなたにお送りして来ましたわ。……わたしたちの苦労も、察してくださいさなければ！ あら、こんなこと言うつもりじゃなかったのに、つい口がすべってしまつて。でもお父さま、わかつてくださるでしょう、わたしたちの気持。情けというものを、お忘れにならないでね。

エレーナ（興奮して夫に）ねえ、アレクサンドル。どうぞお願い、あの人がうまく話をつけて。……後生ですから。

セレブリヤコフ よしよし、なんとか話をつけてこよう。……わたしは何も、あの男を咎めるんじゃない、腹をたてているわけでもない。だがね、まあ考えてもごらん、あの男の言動は、なんとしても妙じゃないかね。まあいいさ、ちよつと行つてこよう。（中央のドアから退場）

エレーナ なるべく穏やかに、あの人の気持を静めるようにね……
：（続いて退場）

ソーニヤ（乳母に抱きつきながら）ばあや！ ばあや！

マリーナ なんでもありませんよ、お嬢ちゃん。鷺鳥がガアガ

ア言っただけ、——すぐやみますよ。……ガアガア言っただけ——すぐやみますよ。……

ソーニャ ばあや！

マリーナ（ソーニャの頭を撫なでる）まあ、がたがた顫えて、まるで霜のふる真冬みたい！ほんとにまあ、お可かわい哀いそうに。でも神様は、悪いようにはなさいませんよ。……菩提ぼだいじゆ樹の花のお茶か、イチゴの蜜みつのお酒を、ちよいとあがっているうちに、すぐ元どおりになってしまいますよ。……心配するんじゃないやありません、いい子、いい子……（中央のドアをキツと見すえて）おや、また鷺鳥が、騒さわぎだしたよ。まあま、勝手にするがいい！

舞台うらでピストルの音。続けさまにエレーナの悲鳴。ソ
ーニャおびえる。

マリーナ ふん、本当にいやなこと！

セレブリヤコフ （恐怖のあまりよろめきながら駆けこむ）と
めてくれ！ あの男をとめてくれ！ 気がふれたのだ！

エレーナとワーニャ、戸口で争う。

エレーナ （ピストルをもぎとろうとして） およこしなさい！

およこしなさいってば！

ワーニャ 放して、エレーン！ 放せってば！ （振りもぎって、

舞台へ走せ入り、きよろきよろとセレブリヤコーフを捜す）ど

こだ、あいつは？ やつめ、そこにいるな！ （彼をめぐけて

撃つ）見ろ！ （間）駄目か？ また、しくじったか （憤

然と）ええ、ちつ、畜生。（ピストルを床へ投げつけ、よろよ

ろつと椅子いすにすわりこむ）

セレブリヤコーフ茫然。エレーナは壁にもたれて、半病人
の有様。

エレーナ どこかへ連れて行って！ 連れて行って、いつそ殺してちょうだい。……とてももう、あたしここにはいられない、いられない！

ワーニヤ (悲痛な声で) ああ、おれはどうしたんだ！ どうしたんだ！

ソーニヤ (小声で) ばあや！ ばあや！

—幕—

第四幕

ワーニャの部屋。かれ自身の寢室であり、また地所の事務室でもある。窓べの大テーブルに、数冊の出納簿やいろいろな書類が載っている。事務机、戸棚とだな、台秤だいばかりなど。ほかにアーストロフ用のやや小型なテーブル。その上に製図用具や絵具、そばに大きな紙挟み。椋鳥むくどりを入れた鳥籠とりかご。壁には、誰にも用のなさそうなアフリカの地図。レザー張りのばかでつかい長椅子ながいす。左手に、奥の間へ通じるドア。右手に、玄関へ出るドア。右手のドアのところには、百姓

たちがよごさないように、靴ふきマット。——秋の夕暮。
静寂。

テレーギンとマリーナ、向い合せに腰かけ、靴下の毛糸を
巻いている。

テレーギン 早くおしよ、ばあやさん。そろそろお別れに呼び出
される時刻だよ。もう馬車を回すようにって、お声がかかった
からね。

マリーナ (早く巻こうとしながら) あとちよつぴりだよ。

テレーギン ハリコフへ行きなさるんだとき。あすこで暮しなさ

るんだね。

マリーナ それがいいのさ。

テレーギン びつくらなすつたんだねえ。……エレーナさんは、

「もう一刻だつて、ここにはいられない……発たちましよう、さあ発ちましようよ。……とりあえずハリコフへ行つてみて、住めそうな様子だつたら、荷物をとりに人をよこせばいいわ……」

と、こうおつしやるんだ。だから、ほんの身の周りまわの物だけ持つて発ちなさるんだよ。まあ結局、ねえばあやさん、あのご夫婦はここじや暮せない随ずい性しょうだつたんだね。そうした随性だつたんだね。……これも前世の約束ごとさ。

マリーナ それがいいのさ。さっきのあの騒ぎといつたら——ピ

ストルまで振回してき。いい恥つさらしだよ。

テレーギン アイヴァゾーフスキイあたりに描かせたら、さぞいい嵐あらしの絵ができるだろうねえ。

マリーナ 二度とこの目で見たくないものさ。(間) これでまた、もとどおりの暮しができるわけさね。朝は八時前にお茶。十二時すぎにはお昼。暮がたには晩の食事。ばんじ世間の人さまなみに……きちんきちんとやってゆけますよ。……(ため息いきをついて) わたしやもう久しいこと、お素そうめん麵を食べないよ、情けないったらありやしない。

テレーギン まったくね、長く素麵を打たなかつたなあ。(間) 長らくねえ。……けさもね、ばあやさん、わたしが村を歩いて

いると、あの店の亭主がうしろからね、「やあい、居い候そうろう！」
つて、はやすじやないか。つくづく、つらくなつたよ。

マリーナ ほつておおきよ、そんなやつ。わたしたちはみんな、
神さまの居候じやないか。あんたも、ソーニャちゃんも、ワー
ニャさんも——誰一人として、安閑と坐すわっている者はないよ、
みんなせつせと働いていなさるんだよ。誰も彼も。……ソーニ
ャちゃんはどこにいなさる？

テレーギン 庭だよ。ドクトルと一緒に、ワーニャさんを捜しに
歩いていなさるんだよ。万が一、自殺でもされたら困るからね
え。

マリーナ ピストルはどうしたの。

テレーギン (ひそひそ声で) わたしが穴倉へ匿^{かく}したよ。

マリーナ (薄笑いして) 罪なこった!

表からワーニヤとアーストロフがはいつてくる。

ワーニヤ ほつといてくれたら。(マリーナとテレーギンに)

あっちへ行つてくれ、せめて一時間でも、僕を一人で置いてくれよ。こう見張りつきじやまったくやりきれん。

テレーギン すぐ行くよ、ワーニヤ。(爪^{つま}さき立ちで退場)

マリーナ 鷺^{がちよう}鳥が、ガア、ガア、ガア! (毛糸をまとめて退

場)

ワーニャ 君もかまわんでくれたら。

アーストロフ それはこつちから頼みたいくらいだ。なにしろ僕は、もうとつくに家へ帰らなけりやならない人間なんだからね。ところが、最前から幾度も言うとおおり、君が取つたものを返してくれない限り、僕は帰るわけにはゆかないんだ。

ワーニャ 何も取りやしないよ。

アーストロフ ばかもいいかげんにしたまえ——そう人をじらすもんじやないよ。僕は早く帰らなきやならないんだぜ。

ワーニャ なんにも取りやしないたら。

アーストロフ へえ、そうかい？ じゃ、もうちよつとだけ待つてやろう。その上は、済まないけれど、力ずくで取返すから、

そう思い給え^{たま}。君をふん縛つて、それから捜すんだ。僕は本気で言つてるんだぜ。

ワーニヤ どうなりと好きにするさ。(間) まったく、へまをやつたものだなあ。二度も撃ちながら、一発もあたらないなんて！ われながら愛想がつきたよ。

アーストロフ そんなに撃ちたいんなら、いつそのこと、自分の眉間^{みけん}をぶち抜くがいいさ。

ワーニヤ (肩をすくめて) どうも変だよ。僕は人殺しをやりかけたのに、縛ろうとも訴えようともする人がない。つまりは、僕を気ちがい扱いにしているわけだな。(毒々しい笑い) この僕が気ちがい、その一方、大学教授だとか大学者だとかいう

お面をかぶって、まんまと自分の鈍才ぶりやばかさかげんや、呆れ返った不人情ぶりをごまかしているやつが、真人間だといあきうのかい。わざわざ年寄りのところへ嫁に来て、人前で堂々と現在の亭主を裏切るような女が、真人間だというのかい。僕は見たぜ、ちやんとこの眼で見たぜ、君がああの女を抱いてるところをさ。

アーストロフ　いかにも、そのとおり、抱きましたとも。ところが君は、ほら、これさ。（鼻をつまんで見せる。——振られたという仕草）

ワーニャ　（ドアを見ながら）へん、気がふれてるのはこの地球のほうさ、のめのめと君たちを生かしくなくなてね。

アーストロフ ちえつ、何をばかな。

ワーニヤ まあ仕方がないさ——どうせ僕は気ちがいなんだから、責任を負う力もないし、どんなばかを言つたつていいわけだ。

アーストロフ その手は古いよ。君は気ちがいどころか、つむじのまがつた唐変木とうへんぼくだよ。まったく、ふざけた男だよ。僕は前

にや、唐変木というやつは、みんな常軌を逸した病人ばかりかと思つていたが、今こんにち日ではもう、人間のノーマルな状態が、すなわち唐変木なんだと、そう意見を変更したね。君はまったくノーマルな男だよ。

ワーニヤ (両手で顔をおおう) 恥ずかしい！ この僕の恥ずかしさが、君にわかつてもらえたらなあ！ 恥ずかしい、まったく

く恥ずかしい。(やるせない声で) ああ、たまらない！ (テ
ーブルにうなだれる) 一体どうしたらいいんだ。どうしたら。
アーストロフ まあ、仕方がないさ。

ワーニャ どうにかしてくれ！ ああ、やりきれん。……僕はも
う四十七だ。仮に、六十まで生きるとすると、まだあと十三年
ある。長いなあ！ その十三年を、僕はどう生きていけばいい
んだ。どんなことをして、その日その日をうずめていったら
いいんだ。ねえ、君……(ぐいと相手の手を握って) わかるかい、
せめてこの余生を、何か今までと違ったやり口で、送れたらな
あ。きれいに晴れわたった、しんとした朝、目がさめて、さあ
これから新規時^{まきな}直^{なお}しだ、過ぎたことはいっさい忘れた、煙み

たいに消えてしまった、と思うことができたらなあ。(泣く)

君、教えてくれ、一体どうしたら、新規蒔直しになるんだ。：

：どうしたらいいんだ。……

アーストロフ (腹だたく) ちえつ、しよのない男だなあ。

今さら新規蒔直しも何もあるものか。君にしたって僕にしたって、もうこれで、おしまいだよ。

ワーニヤ やっぱりそうか。

アーストロフ ああ、断じてね。

ワーニヤ そこを、なんとかしてくれ。……(胸をさして) ここが焼けつくようなんだ。

アーストロフ (癩癩かんしゃくまぎれにどなる) よせたら！ (言

葉を柔らげて）そりや百年二百年たったあとで、この世に生れてくる人たちは、みじめなわれわれが、こんなにばかばかしい、こんなに味けない生涯を送ったことを、さだめしけいべつ軽蔑するだろう。そして、なんとか仕合せにやっけていく手を、見つけだすかもしれない。だが、われわれは結局……。いや、われわれにはお互い、たった一つだけ希望がある。その希望というのは、われわれがお棺の中で目をつぶったとき、何か幻が、訪れてきてくれるはしまいかということだ。それも、何かしら楽しい幻がね。（ため息をついて）まったくだよ、君。この郡内で、しゃんとした、頭のある人間といったら、君と僕と、たった二人しきやいなかったものだ。ところがどうだ、この十年ほどの俗っ

ほい下劣な生活のおかげで、まんまとわれわれも、泥んこの中へ引きずり込まれてしまったじゃないか。その毒気に当てられて、僕たちは骨の髄まで腐っちまったじゃないか。そしてお互い、世間なみの凡俗に成り下つちまったじゃないか。（早口に）いや、しかし、こんなことじゃ誤魔かされんぞ。さ早く、あれを返したまえ。

ワーニヤ 何も取りやしないというのに。

アーストロフ いいや君は、僕の薬箱のなかから、モルヒネの壘^{びん}を取ったんだ。（間）いいかね、君がもし、どうあつても自殺したいと言うのなら、森の中へ行つて、ずどんと一発やるがいさ。だが、あのモルヒネだけは返してくれ。さもないと世間

の口がうるさいからね。まるで僕がわざわざ君にやったみたい
に言われちゃ、かなわないからね。……僕はいずれ、君の死骸しがい
の解剖をしなけりやなるまい、それだけでもう沢山だよ。……
くそ面白くもない。

ソーニャ登場。

ワーニャ ほつといってくれたら。

アーストロフ (ソーニャに) ねえソーニャさん。あなたの伯父
さんは、僕の薬箱のなかからモルヒネを一壇ちよろまかしてお
きなから、どうしても返してくれないんですよ。言つて聞かし

てください、ばかなまねも……いいかげんにしろってね。だいいち僕は、こうしちやいられないんです。早く帰らなくちや。

ソーニヤ　ワーニヤ伯父さん、ほんとお取りになったの？

(間)

アーストロフ　取ったんですよ。ちやんとわかつてる。

ソーニヤ　お出しなさい。なぜそう、わたしたちをおどかしてばかりいらつしやるの？　(優しく)　ね、お出しなさいね。ワー

ニヤ伯父さん！　そりやわたしだって、あなたに負けなくらい不仕合せかもしれないわ。けれども私は、やけになったりはしません。じつところえて、しぜんに一生の終りがくるまで、がまんしとおすつもりですわ。……あなたも我慢なすってね。

(間) き、出してちょうだい！ (伯父の両手にキスする) ね

伯父さん、お願い、いい子だから出してちょうだい！ (泣く)

伯父さんはいい人ね、あたしたちを、可哀かわいそうだと思って出してちょうだい。我慢してね、伯父さん、我慢してね！

ワーニャ (テーブルの抽斗ひきだしから壘を出して、アーストロフに

渡す) き、持っていきたまえ！ (ソーニャに) とところで、早

く働こうじゃないか、一刻も早く、何か始めようじゃないか。

さもないと、とてもこのままじゃ堪たまらない……とても駄目だ……

：

ソーニャ ええ、ええ、働きましようね。お父さまたちが発たつていらしたら、さっそく仕事にかかりましようね。……(テーブル

ルの上の書類を、いらだたく選り分けながら）すつかり投げやりになっているわ。

アーストロフ （壇を葉箱に納め、革紐かわひもをしめる）さあ、これでやつと帰れると。

エレーナ （登場）まあワーニヤさん、ここにいらしたの？ わたしども、もう発ちますから、アレクサンドルのところへいらしてちようだいな。何かお話があると云つてますわ。

ソーニヤ 行つてらっしゃいね、ワーニヤ伯父さん。（ワーニヤの脇わきをかかえる）さ、行きましよう。お父さまと仲直りなさらずなくちや駄目よ。ね、そうでしよう。

ソーニャとワーニャ退場。

エレーナ　じゃ、これでもう発ちますわ。（アーストロフに手を差しだす）ご機嫌よう。

アーストロフ　もうですか？

エレーナ　馬車の支度もできましたわ。

アーストロフ　さようなら。

エレーナ　さつき約束してくださいましたわね、もうここへはいらっしゃらないって。

アーストロフ　ええ、忘れやしません。（間）びつくりなすつた
ですか？（女の手をとる）そんなに怖こわかったですか？

エレーナ ええ。

アーストロフ いっそのままで、ここにおられたらどうです、ええ？ そしてあす、あの森の番小屋で……

エレーナ いいえ。……もう決りましたわ。……もう発つことに決ったからこそ、こうして大胆に、あなたのお顔を見ていられるのよ。……この上、たった一つのお願いは、このあたしを、ちやんと見直して頂きたいことだけ。あたし、変な女と思われていたくないの。

アーストロフ ちえつ、しょうのない人だ！ （じれったそうな身ぶり）お願いだから、このままここにいてください。いいですか、あなたはこの世で、何ひとつする仕事のない人だ。何ひ

とつ生きる目当てのない人だ。何ひとつ気のまぎれることのない人だ。だから晩おそかれ早かれ、所詮しよせんは情に負けてしまう人なんだ、——これは、ちゃんと決ったことなんです。どうせそうなるからには、ハリコフだのクールスクだのという町よりか、いつそこの、自然のふところにいだかれた土地のほうが、百倍も千倍も増しじゃないですか。……すくなくも、そのほうが詩的だし、ずっと美しいじゃないですか。……ここには森小屋もある、ツルゲーネフ好みの崩れかかった地主屋敷もある。……エレーナ おかしなかたねえ、あなたも。……聞けば聞くほど腹がたつわ。……でもあたし……きつとあなたのことは、嬉しい思い出になると思うの。あなたは面白い風変りなただわ。も

うこの先、二度とお目にかかることはないでしょう。だから——だから思いきつて言いますけれど、あたし、いささか、あなたにぼうつとなつたくらいよ。さ、仲よく握手をして、それでお別れにしましょうね。悪く思いつこなし。

アーストロフ（手を握つて）ええ、お発ちなさいとも。……

（物思わしげに）まったくあなたという人は、根が実直な、いい人のようじゃあるけれど、そのくせなんだかこう、不思議なところのある人だなあ。現に、あなたがご亭主といつしよにここへ見えると、それまでせつせと働いて、その辺をごそごそやって、何かこう仕事らしいことをしていた連中が、たちま忽ちみんな仕事をうつちやらかして、まるひと夏というもの、ご主人の痛

風だの、あなたのことだので、無我夢中になってしまふんだからなあ。あなたがた夫婦のぐうたらな暮しぶりが、みんなうつちまつたんだからなあ。僕はすっかりのぼせあがって、まる一ト月というもの、何ひとつやらなかった。そのあいだに、病人は、うじやうじや出てくる。僕の森や苗木の林じゃ、百姓が牛や馬を放し飼いにする。……まあ、こんな具合に、あなたがた夫婦という人は、どこへ行っても、その暮しをめちやめちやにするんですねえ。……いや、もちろんこれは冗談。だが、しかし、……どうも不思議だなあ。もしこの上、あなたがたがここに居坐いすわつていたら、それこそ何もかも、ごつそり行かれてしまうことでしょうねえ。僕の身も破滅だろうし、あなただつ

ても、どうせろくなことはないでしょうよ。さ、さっさとお発
ちなさい。もう芝居は沢山！

エレーナ（アーストロフのテーブルから鉛筆を取りあげ、すば
やく胸にかくす）この鉛筆、記念に頂いとくわ。

アーストロフ どうも不思議だ。……せつかくこうして知り合い
になったものが、いち夜明ければもう……二度と会うこともな
い赤の他人だなんて。これが人生というものかもしれない。……
……誰もいないうちに、またワーニヤ伯父さんが花束をかかえて
はいつてこないうちに、お願いですから一ぺんだけ……キスを
させてください。……お別れのしるしに……いいでしょう？

（女の頬にキスする）ああ、これで……もういい。

エレーナ ご機嫌よう。(あたりを見回して) ええ、構やしない、一生に一度だわ！ (いきなり男を抱きしめる。途端にさっと離れる) もう行かなくては。

アーストロフ 早く発ってください。馬車の用意ができたのなら、さあ早く発ってください。

エレーナ 誰かこつちへ来るわ。(兩人、聴き耳をたてる)
アーストロフ これでおしまい！

セレブリヤコフ、ワーニャ、本を手にしたヴォイニーツ
カヤ夫人、テレエギン、ソーニャ登場。

セレブリヤコフ (ワーニヤに) 古いことをかれこれ言いだす
やつは、目がつぶれてしまふがいいんだ。あの騒動があつてこ
のかた、ほんの四、五時間のあいだに、わたしはつくづく悟る
ところがあつた。しみじみ考え直すところがあつた。人間いか
に生くべきかということについて、後世への遺訓ともなるべき
一大論文だつて、書こうと思えば書けるぐらいだ。わたしは喜
んで君の詫^わび言葉を受入れます。と同時に、こちらからも厚く
お詫^わびを申述べたい。ではご機嫌よう！ (ワーニヤに三度接^せ
吻^{つぶん}する)

ワーニヤ この先も月々の仕送りは、ちゃんと今までどおりにし
ますよ。何もかも水に流してね。

エレーナ、ソーニャを抱きしめる。

セレブリヤコーフ（ヴォイニーツカヤ夫人の手に接吻する）では、お母さん……

ヴォイニーツカヤ夫人（接吻を返して）アレクサンドル、また写真をとって、送ってくださいよ。わたしの気持は、よくご存じのはずだね。

テレーギン では御前さま、ご機嫌よろしゅう。どうぞ、わたくしどもをお忘れなく！

セレブリヤコーフ（ソーニャに接吻して）さようなら。……皆

さん、ご機嫌よう！ （アーストロフに手を差しのべて）楽しくご交際を頂いてありがとう。……わたしはもとより、あなたの物の考えようや、あなたの熱心や感激性を、大いに尊重します。だが一つだけ、この年に免じて、お別れのしるしに、一言忠告をゆるして頂きたい。皆さん、仕事をしなければいけませんぞ！ 仕事をしなければ！ （一同に頭を下げる）ではご機嫌よう！ （退場）

ヴォイニーツカヤ夫人とソーニヤ、その後にしたがう。

ワーニヤ （エレーナの手にひしと接吻して） さようなら。……

赦^{ゆる}してください。……二度とお目にかかる時はありますまい。

エレーナ（涙ぐんで）さよなら、ワーニャさん。（ワーニャの髪に接吻して退場）

アーストロフ（テレーギンに）ねえワツフル、おもてへ行って、ついでに僕の馬車も、回してくれるように言ってくれないか。

テレーギン ああ、いいともさ。（退場）

アーストロフとワーニャの二人だけ残る。

アーストロフ（テーブルの上の絵具を片づけて、トランクの中
にしまう）どうして見送りに出ないんだね？

ワーニヤ このまま発って行くがいいのさ。とても僕には……いや駄目だ。つらいんだよ。さ、一刻も早く何かしなくちや。……仕事だ、仕事だ！ （テーブルの上の書類を引つかきまわす）

間。馬車の鈴の音。

アーストロフ 行ってしまった。教授閣下、さぞ嬉しいこつたろう。もう二度とふたたび、ここへは足踏みもしないだろうて。

マリーナ （登場） お発ちになりましたよ。（肘かけ椅子にかけて、靴下を編む）

ソーニヤ （登場） お発ちになってよ。（目を拭く）道中ご無事

でね。(伯父に) さあ、ワーニャ伯父さん、仕事をはじめましょうね。

ワーニャ そう、仕事だ、仕事だ。……

ソーニャ もうずいぶん永いこと、ご一緒にこのテーブルに坐らなかつたことねえ、ずいぶん永いこと。(テーブルの上のランプに火を入れる) あら、インキがないらしい。……(インキ壺つぼを取って戸棚の前へ行き、インキを入れる) なんだか淋さびしいわ、こうしてお癪ちになつてしまふと。

ヴオイニーツカヤ夫人 (そろそろと登場) 行つてしまつた!

(腰をおろして読みふける)

ソーニャ (テーブルに向つて腰かけ、帳簿をめくる) じゃあ、

ワーニヤ伯父さん、勘定書から始めましょうね。すつかり、ほつたらかしになつてるわ。今日も勘定書を取りに来た人があるのよ。じゃ書いてくださいね。あなたはそつち、わたしはこつちを書くわ。……

ワーニヤ（書く）「一つ……ええと……」

兩人無言のままペンを走らす。

マリーナ（あくびをして）ああ、ねむ睡いこと。……

アーストロフ 静かだなあ。ペンのきしる音と、コオロギの啼なきごえがするだけだ。ほかほかして、いい気持だ。……なんだか

帰っていく気がしないなあ。(馬車の鈴の音) いや、馬車が来た。……仕方がない。じゃ皆さん、ご機嫌よう。ついでに私の机もご機嫌よう。——あとは、夜道をすつ飛ばすだけです。

(凶面を紙挟みに納める)

マリーナ 何もそう、あわてなさらないでも。まあ、ごゆるりとなさいましょ。

アーストロフ そうはいかないんだ。

ワーニャ (書きながら) ええと、未払金の残額、ニルーブリ七十五也なりと……

下男登場。

下男 アーストロフ先生、馬車の用意ができやした。

アーストロフ わかったよ。（薬箱、トランク、紙挟みを下男に渡す）じゃ、これを頼む。紙挟みをつぶさんでくれよ。

下男 へえ。（退場）

アーストロフ じゃ、これで……（と、別れを告げに進む）

ソーニヤ この次は、いつお目にかかれて？

アーストロフ まあ、来年の夏でしょうな。この冬は、まずもつて見込みがなさそうです。……もつとも、何かあつたらお知らせ願いますよ——即刻、駆けつけますからね。（握手する）い

ろいろとおもてなしを頂いたり、親切にして頂いたり……お礼

の申上げようもありません。(乳母のそばへ行き、その髪に接吻する) ご機嫌よう、ばあやさん。

マリーナ まあまあ、お茶もあがらずにお発ちですか？

アーストロフ いや、いいんだよ、ばあや。

マリーナ では、ウオトカでも一つ。

アーストロフ (決しかねて) そうさなあ。……

マリーナ退場。

アーストロフ (間をおいて) 僕の馬車のね、副^そえ馬のやつが、
どうやらびっこを引いているんだ。きのう、うちの馭^{ぎよ}者^{しや}が、

水を飲ませに連れて行く時から、気がついていたんだがね。

ワーニヤ 蹄鉄ていてつを打ち直すんだね。

アーストロフ ロジジエストヴェンノエ村で、鍛冶屋かじやに寄って行かなくちやなるまい。まあ仕方がない。(アフリカ地図の前へ行って眺める) 今ごろはこのアフリカじゃ、さだめて焼けつくような暑さなんだろうな——まったくかなわんなあ！

ワーニヤ ああ、そうだろう。

マリーナ (ウオトカの杯とパンを一きれ載せた盆をささげて戻ってくる) さあさ、めしあがれ。

アーストロフ、ウオトカを飲む。

マリーナ どうぞご息災でね、旦那。だんな（低く辞儀をする）パンも
ちつとめしあがったら。

アーストロフ いいや、もう沢山。……では皆さん、ご機嫌よう。
（マリーナに）送ってこないでもいいよ、ばあやさん。いいん
だよ。（退場）

ソーニャ 蠟ろうそくをもつて見送ってゆく。乳母は肘掛ひじかけ椅子いすに
腰をおろす。

ワーニャ （書く）ええと、二月二日、精進油しょうじんゆ二貫五百目。：

…二月十六日、またも精進油二貫五百目。…それから碾割^{ひぎわ}りソバがと…（間）

馬車の鈴。

マリーナ あ、お発^たちだ。

間。

ソーニヤ （戻ってきて、蠟燭をテーブルに立てて）お発ちにな
ったわ。…

ワーニャ (算盤そろばんをはじいて書きつける) ええと、締めて……

八十五ルーブリと……二十五コペイカ也……

ソーニャも腰かけて書く。

マリーナ (あくびをする) ああ、神さま、どうぞお赦しを……

テレーギン、つまさき立ちで登場。ドアの横に腰をおろして、そつとギターの調子を合せる。

ワーニャ (ソーニャの髪の毛を撫なでながら) ソーニャ、わたし

はつらい。わたしのこのつらさがわかってくれたらなあ！

ソーニヤ　でも、仕方がないわ、生きていかなければ！　（間）

ね、ワーニヤ伯父さん、生きていきましようよ。長い、はてしないその日その日を、いつ明けるとも知れない夜また夜を、じつと生き通していきましようね。運命がわたしたちにくだす試みを、辛抱づよく、じつとこらえて行きましようね。今のうちも、やがて年をとってから、片時も休まずに、人のために働きましようね。そして、やがてその時が来たら、素直に死んで行きましようね。あの世へ行ったら、どんなに私たちが苦しかったか、どんなに涙を流したか、どんなにつらい一生を送って来たか、それを残らず申上げましようね。すると神さまは、ま

あ気の毒に、と思つてくださる。その時こそ伯父さん、ねえ伯父さん、あなたにも私にも、明るい、すばらしい、なんとも言えない生活がひらけて、まあ嬉しいうれ！ と、思わず声をあげるのよ。そして現在の不仕合せな暮しを、なつかしく、ほほえましく振返つて、私たち——ほつと息がつけるんだわ。わたし、ほんとにそう思うの、伯父さん。心底から、燃えるように、焼けつくように、私そう思うの。……（伯父の前に膝をついて頭を相手の両手にあずけながら、精根つきた声で）ほつと息がつけるんだわ！

テレーギン、忍び音にギターを弾く。

ソーニヤ ほつと息がつけるんだわ！ その時、わたしたちの耳には、神さまの御使^{みつかい}たちの声がひびいて、空一面きらきらしたダイヤモンドでいっぱいになる。そして私たちの見ている前で、この世の中の悪いものがみんな、私たちの悩みも、苦しきも、残らずみんな——世界じゅうに満ちひろがる神さまの大きなお慈悲のなかに、呑^のみこまれてしまうの。そこでやっと、私たちの生活は、まるでお母さまがやさしく撫^なでてくださるような、静かな、うっとりするような、ほんとに楽しいものになるのだわ。私そう思うの、どうしてもそう思うの。……（ハンカチで伯父の涙を拭いてやる）お気の毒なワーニヤ伯父さん、い

けないわ、泣いてらっしやるのね。……（涙声で）あなたは一生涯、嬉しいことも楽しいことも、ついぞ知らずにいらしたのねえ。でも、もう少しよ、ワーニャ伯父さん、もう暫くの辛抱よ。……やがて、息がつけるんだわ。……（伯父を抱く）ほつと息がつけるんだわ！

夜番の拍子木ひょうしぎの音。——テレーギン、忍び音に弾いている。ヴオイニーツカヤ夫人は、パンフレットの余白に何やら書きこんでいる。マリーナは靴下を編んでいる。

ソーニャ ほつと息がつけるんだわ。

— 静かに幕 —

青空文庫情報

底本：「かもめ・ワーニヤ伯父さん」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年9月25日発行

2004（平成16）年11月25日46刷改版

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

ワーニャ伯父さん

ДЯДЯ ВАНЯ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ——田園生活の情景 四幕——

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>